



藤沢のみどりとともに、さらに10年

特定非営利活動法人

藤沢グリーンスタッフの会 10～20年史

刊行にあたって

特定非営利活動法人
藤沢グリーンスタッフの会
理事長

東 昭一



藤沢グリーンスタッフの会 (FGS) は、2022 (R4) 年4月に創立20周年を迎えることができました。これまでご指導頂いた講師の皆様、ご支援を賜った藤沢市をはじめとする関係各位、そして活動の礎を築いてこられた諸先輩に厚く御礼を申し上げます。

FGSは、2002 (H14) 年4月に、藤沢市主催の「里山保全ボランティアリーダー養成講座」終了者第1期生により結成されました。結成後の10年間の活動は、2013 (H25) 年刊行の「藤沢のみどりとともに10年」で詳しく報告させて頂きました。本紙は、その後の10年についての諸活動をご報告しつつ、今後の方向性と課題を明確にすることを目的に編纂いたしました。

顧みると、この10年間には当会の活動にも大きな影響を与えた歴史的な出来事がありました。

- ・2011 (H23) 年3月、千年に一度のマグネチュード9の東日本大震災が発生。日本中で1ヵ月弱の計画停電。
- ・2014 (H26) 年2月、百年に一度の豪雪。湘南地方でも約50cmの積雪。
- ・2019 (R1) 年10月、被害総額が1.9兆円に及んだ19号台風。市内各地で倒木多数。

・2020 (R2) 年3月、新型コロナウイルス感染症に対し史上初の緊急事態宣言が発令。現在に至るまで終息の見通しは立たず。

このような出来事に対しても、FGSは関係者の皆様のご協力・支援頂きつつ、「藤沢のみどりを守る活動」を継続し、着実な成果をあげてきました。こうした活動の源泉は全会員の熱意と知恵、そして努力であると自負しています。

現在の活動分野は、藤沢市との協働事業対象緑地23ヵ所を中心とした市有緑地の保全活動を基軸として、里山保全ボランティア養成講座の運営、民有緑地の保全活動、環境調査活動、みどり・生物多様性の普及活動、市民・各種団体への支援活動などに整理されます。この10年間において、こうした各活動は地道に拡大を続けてきました。生物多様性の視点を織り込むなど内容も変化させてきました。いわば量と質の両面での成長を果たしてきたと総括できるように思います。詳しくは、本文を参照して頂けると有難いです。

この20年間で里山保全ボランティア養成講座の修了者は累計で378名となりました

一方で、修了者のうちFGSで活動している会員は150名ほどで、ここ数年安定しています。組織的な規模(会員数)は一定の限度を迎えているように思われます。団塊の世代中心の会員構成は高齢化問題を避けて通れません。今後は里山保全ボランティア養成講座で毎年20名程度の受講者を確保することによって正会員数を維持しつつ、準会員制度の活用も検討していかなければなりません。更に、良好な緑地状態の維持、リーダーの育成、使い易い機材の活用、機材運搬レスといった諸課題にも取り組んでいきます。

2018(H30)年に“藤沢市生物多様性地域戦略”が策定され、藤沢市との協働事業に反映されました。社会全体でSDGsのゴ

ールに向けて取り組むことが求められています。全ての活動団体に一定のガバナンスと存在意義(Purpose 経営)も問われる時代になってきています。私たちFGSは、こうした期待に応えられる組織づくりを行ないつつ、引き続き「楽しく、無理なく、安全に」をキーワードに、具体的な緑地保全活動を発展させていきます。

末筆になり誠に恐縮ではありますが、藤沢のみどりと生物の多様性を未来の子供たちに残すために、私たちFGSの今後の活動と発展に引き続きお力添えを賜りたく、講師、行政、各種団体、学校、企業、そして市民の皆さまのご支援とご協力をお願い申し上げ、発刊のご挨拶とさせていただきます。



20周年記念植樹

2023年2月23日 長久保公園にて



神代曙桜と兼六園菊桜を植樹

20周年に寄せて

藤沢市長

鈴木 恒夫



「藤沢グリーンスタッフの会」が設立20周年を迎えられましたこと、心よりお喜び申し上げます。

貴会は、本市が市有緑地等の保全・保護活動を行うボランティアリーダー養成のために開講した「里山保全ボランティアリーダー養成講座」の受講生が中心となり、市有緑地等の保全・保護活動・緑化啓発活動等を行う「藤沢グリーンスタッフの会」として平成16年度に設立されました。

そして、平成19年度からは特定非営利活動法人(NPO)に認定され、藤沢市相互提案型協働モデル事業(緑地(里地里山)保全活動事業)として活動され、平成26年度から藤沢市みどり保全協働事業として本市と保全協働事業の協定を締結し、市内緑地の保全・保護活動をはじめ里山保全ボランティア養成講座の開催、緑の普及啓発活動等、本市の緑地保全に多岐に渡ってご尽力いただいておりますことを深く感謝申し上げます。

近年、地球温暖化の影響による大型台風や局地的な集中豪雨による土砂災害、洪水被害が世界各国で発生し、甚大な被害をもたらしています。

本市では、このような気候危機が人々に深刻な影響を与え、脅威となっている状況を市民や事業者等あらゆる主体とマルチパートナーシップを構築し、SDGsが目指す持続可能な社会の実現に向け、力を合わせて取り組んでいくため、令和3年2月に「藤沢市気候非常事態宣言」を表明いたしました。

市内には、風光明媚な海岸、カワセミが飛来する河川、希少植物が生息している里山等の豊かな自然環境が残っています。このかけがえのない環境を未来の世代に残し、引き継いでいくためにも、本宣言の取り組みを推進しているところです。

貴会におかれましては、日ごろから樹林等の手入れ等により、荒廃した緑地の再生や本宣言の取り組みの一つである「気象災害から市民の安全な暮らしを守るため、風水害対策を強化します。」を実践いただいております。さらには、企業、市民団体の緑地保全支援、児童・学生の自然観察学習の支援、生物多様性を学ぶ場と機会の提供等、市民が自然環境にふれあう機会の創出に、多大なるご貢献をいただいていると感じております。

今後も緑地保全・保護、生物多様性の保全等の活動を継続していただくことで、市民の皆様が本市の自然環境を、より身近な魅力として感じ、「郷土愛あふれる藤沢」を実感できることと確信しております。

結びとなりますが、「藤沢グリーンスタッフの会」のますますのご発展と皆様のご健勝・ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

20周年おめでとうございます。



カワセミ

(藤沢市のホームページより)

藤沢グリーンスタッフの会

会員の皆様へ

藤沢市 都市整備部長

川崎 隆之



「藤沢グリーンスタッフの会」設立20周年を心よりお喜び申し上げます。

本市では、全国的な人口減少社会が進行する中で、人口の増加が続いており、近年では人口が44万人を超えるなど、住みやすいまちづくりを進めているところです。併せて、藤沢市緑の基本計画で定めた緑の将来像「湘南のみどりと共にくらすまち・ふじさわ」を基本理念として、令和4年7月に開園した遠藤笹窪谷公園をはじめとした新たな公園の開設や三大谷戸の保全に向けた取組を行うなど、緑の普及について様々な施策の推進を図っているところです。

一方で、人口増に伴う都市化の進展により、現存する緑地の確保や、里山環境の復元、また残された緑地の質を高めていくための手法の構築などが喫緊の課題となっております。

そのような中、本計画では施策の一つに「市民が主体のまちづくりの推進」を掲げ、藤沢グリーンスタッフの会をはじめとする市民団体の方と共に「保全」「創造」「連携」「普及」「共生」に関する取組を進めているところでございます。

さらに、平成30年度には「藤沢市生物多様性地域戦略」を策定し、生物多様性の保全と持続可能な利用の取組を進めるため、「生き物の恵みを感じるまち藤沢」を将来像に掲げ、まずは、生物多様性の普及に向けた「啓発」や「協働」の推進を図ることと併せ、自然が持つ多様な機能を活用した里山環境やビオトープ施設の構築、また生物多様性の保全と防災・減災に寄与するグリーンインフラの考えを取り入れた整備を進めているところでございます。

そのうえで、藤沢グリーンスタッフの会の皆様におかれましては、これら本市の計画に沿った生物多様性の視点を取り入れたきめ細やかな緑地の保全活動（保全・創造）や、団体活動への支援（連携・普及）、また、環境調査事業、ビオトープ管理や川名清水谷戸等の希少種の保全など、豊富な知識や経験を生かした対応をしていただくとともに、毎年、長久保公園で開催する「春の緑と花のまつり」では、親子で緑に触れる機会を設けていただくなど、多大なるお力添えをいただいているところでございます。

また、コロナ禍の中、リモートワークの増加や、行楽の機会が減ったこと等から、屋外でのボランティア活動（普及・共生）に関する関心が高まり、ここ数年、里山ボランティア養成講座への募集も増えてきている状況下、一層の活動を期待しているところでございます。

この様に緑や生物多様性の保全について様々な取組を実施していただいていることで、市民にとってより親しみやすい緑地が少しずつ増えてきていることに感謝を申し上げますとともに、設立20周年の節目の年を迎えた貴団体の益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。



20周年、おめでとうございます

東レ株式会社 基礎研究センター
理事 医薬研究所長

吉川 正人



この度は、「藤沢グリーンスタッフの会」の設立 20 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

東レ(株)基礎研究センターは、新林公園谷戸、川名清水谷戸、手広大谷谷戸の三連谷戸のひとつである手広大谷谷戸を敷地内に含み、藤沢市、鎌倉市にまたがる広大な緑地を有しています。この豊かな自然環境は、ここで働く研究者達が思索に耽り、創造性を発揮するために大きな役割を果たしていますが、鎌倉市の自然環境調査(2003 年)によると約 180 種もの植物、約 500 種の昆虫類、その他多くの哺乳類や鳥類、爬虫類などが生息し、生物多様性の観点からも貴重な谷戸とされており、弊社にとっては、地域社会の一員としてこの貴重な谷戸を含む緑地帯をいかにして保全していくかという点も長年の課題でありました。

そのような折、元弊社副社長であった故今村武彦氏と「藤沢グリーンスタッフの会」所属の笹脇氏が大学学部の先輩後輩の間柄で長年交流を深めていたご縁から、弊所を紹介していただき、2010 年より年 4 回、敷地

境界地の樹木剪定や除草、ならびに所内緑地の間伐緑化保全、藤沢市境界遊歩道の整備など多岐にわたり弊社の緑化保全活動にご協力いただいております。

近年ではコドラート法による所内の植生調査を実施し、鎌倉市が「貴重種、注目種」として定めているキンラン、ギンラン、カンアオイなどの植物を確認いただきました。そのほかにも、竹林や椿林の剪定、181 本にもおよぶ桜の木の保全活動など所内の景観整備にも力を入れてくださり、窓から見える桜並木など、四季折々の景観を所員皆で楽しませていただいております。

このコロナ禍にて、「藤沢グリーンスタッフの会」の皆様におかれましては作業するに当たり不自由なことも多かったと拝察いたしますが、常に安全に作業いただいていること、心より感謝申し上げます。

未筆ながら、「藤沢グリーンスタッフの会」の今後一層のご発展と、皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます

CSR活動サポートへの感謝



アズビル株式会社

環境推進部 環境価値創造グループ

FGS が設立20周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

当社の研究開発拠点が位置する藤沢市における、緑地保全活動を通じた地域社会への貢献の一環として、2011年に藤沢市と緑地保全活動に関する協定を結び、同市での活動を継続して実施させていただいております。近年は西富第二緑地と大庭裏門公園において年2回の活動を実施してきましたが、FGS には取組開始当初より、毎回、事前の下見から活動内容の企画、当日の指導など、幅広くご支援をいただき大変感謝しております。

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、社員の現地活動を自粛せざるを得ない状況ではありますが、FGS の皆様のご支援をいただき、2020年よりオンライン保全活動として継続しています。

オンライン保全活動とは、当社事務局が現地において保全活動の様子や自然観察を取材させていただき、オンラインにて写真や動画を利用しながら、社員参加者に詳しく解説すると共に緑地保全活動に関わるディスカッションも行う活動です。以前から活動をしている西富第二緑地と大庭裏門公園を中心

に社内にてオンラインセミナーとして展開しています。

第1回目(2021年3月)は、西富第二緑地の台風で荒れた森を FGS の皆様のご協力のもと、整備活動や自然観察ツアーを実施した様子を共有し、緑地保全活動のテーマでディスカッションをしました。

第2回目(2021年7月)は、大庭裏門公園での野鳥や水辺の植生について詳しく解説(ディスカッションのテーマ:「人は自然とどのように関わるか」)、第3回目(2022年2月)は、再び西富第二緑地にて、前回とは異なるエリアや、違う視点からの自然観察の様子を紹介しました(ディスカッションのテーマ:「森の新陳代謝と保全活動」)。初めの頃は試行錯誤でしたが、現在ではスムーズな進行ができるようになり、参加者も増えて来ました。

オンラインセミナーの参加者からは、「今まで関心はあったけど、なかなか参加できなかった。オンラインだと参加しやすい」、「自然について詳しく知ることができた」等の意見をいただいています。県外や遠隔地にいる社員も多数セミナーに参加しており、オンライン活動により、現地活動のみでは得られなかった参加者の広がりを実感しています。ま

た、環境保全活動に興味がある社員の掘り起こしにもつながっており、現地活動再開時に新規参加者が増えることを期待しています。また、オンライン保全活動において藤沢緑地保全活動の課題等をテーマにディスカッションを実施することにより、参加者自身も自分の事としてとらえるきっかけにもなっています。

オンライン緑地保全活動継続のため、FGSの皆様にご協力いただき大変感謝しております。コロナ禍が落ち着き、社員ボランティアも参加しての現地活動が再開した際には、ご支援、ご指導よろしくお願い致します。FGSの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致します。



アオサギ(裏門公園にて)



落葉溜まり(西富第二緑地にて)

目次

刊行にあたって

FGS 理事長 東 昭一…………… P. 1

20周年に寄せて

藤沢市長 鈴木恒夫…………… P. 3

藤沢グリーンスタッフの会会員の皆様へ

藤沢市都市整備部長 川崎隆之… P. 5

20周年、おめでとうございます

東レ株式会社基礎研究センター

理事医薬研究所長 吉川正人…… P. 7

CSR活動サポートへの感謝

アズビル株式会社 環境推進部

環境価値創造グループ…………… P. 8

産声をあげてからの10年概況…………… P.11

その後の10—20年概況…………… P.17

第1章 緑地保全事業…………… P.18

第2章 養成講座事業…………… P.23

第3章 環境調査事業…………… P.27

第4章 普及啓発事業…………… P.34

第5章 支援事業…………… P.38

第6章 民間緑地事業…………… P.43

第7章 事務局運営・

事務局事業…………… P.48

第8章 20年の総括と

今後の課題…………… P.54

参考資料…………… P.57

1. 協働事業・保全事業緑地及び

運営体制一覧(2021年)… P.58

2. 協働事業・保全事業緑地

の地図…………… P.59

3. 各種事業・保全活動緑地

の地図…………… P.59

付編…………… P.60

1. FGS概要

(2022年7月1日現在)…… P.61

2. 歴代役員名簿…………… P.61

3. 年表…………… P.62

編集後記…………… P.65

* 凡例

1. 年号は西暦で表示し、全て年度を表す(必要に応じて括弧内に和暦も表示)。

2. 収録対象期間は2012年4月～2022年3月とする(必要に応じてそれ以前も補足)。

3. 会社名は初出のみ正式名称を記載し、再出は略称とする。

4. 本会会員以外の方々の役職は初出のみ当時のもので記載し、再出は略称とする。

産声をあげてからの10年概況 (10年史からの抜粋)



活動開始時の腕章

1. 誕生の経緯

① 2000年 藤沢市構想とFGSの母体

藤沢市はボランティアによる市内緑地の保全を行うために、その主体となるリーダーと団体を育成することを計画した。それは、1年間を掛けて諸知識やスキル修得する「ボランティアリーダー養成講座」を開設し、公募した市民のなかから、5年間で100人のボランティアリーダーを養成しようとするものであった。この計画は2001年から実行に移され、第1期の講座を修了したメンバーが新しい市民活動団体を創設し、現在の「藤沢グリーンスタッフの会」の母体になった。

2. 産声をあげて

① 2001年 第1期養成講座が開設

環境庁の補助金制度を活用した「ボランティアリーダー養成講座」は、当時全国でも先駆的な取り組みであった。この講座は現在でも市民ボランティアを育成し続けて、市民による緑地保全活動の母体となっている。

② 2002年 2緑地で自主活動を開始

第1期養成講座の修了生は、藤沢市が選定した川名清水谷戸(森林基地)と西俣野緑地(竹炭焼き基地)の2つの緑地で自主活動を開始した。

その後、西富憩いの森、大庭遊水地、裏門公園、小糸台ビオトープ池づくりの活動が加わった。さらに市内活動団体との交流や各市民活動団体への支援活動も行うようになった。そして「藤沢グリーンスタッフ1期生の会」を結成し、緑地保全活動団体としての組織化を行った。

③ 2003年 みどり課が事務局運営

第2期養成講座修了生を迎え、「藤沢グリーンスタッフ1, 2期生の会」と名称を変更した。運営事務は、藤沢市みどり課に担ってもらい、会の運営活動は養成講座期単位の幹事合議制で行い、懇親会的雰囲気が強かった。稲荷の森の「みどりいっぱい市民の会」との交流活動、長久保公園の樹木剪定や大庭城址公園のテング巢病処理などの支援活動も実施した。また、イベントへの参加も始め、活動領域を拡大した。



川名の当時の田んぼのある風景

3. 黎明(念願の出発へ)

① 2004年 会員数54名、組織化

第3期講座修了生が加わったことから、会の名称を「藤沢グリーンスタッフの会(略称FGS)」に変更した。組織も見直しを行い、代表者を選出したうえで、幹事を軸とする組織とした。組織運営は、全体会議を2回/年、幹事会を1回/2ヵ月開催することとした。第1回の全体会議において活動目的を明確にした。その目的は「この会は、藤沢の里地里山の整備を行うことにより緑地の保全を図るとともに、活動を通じて藤沢の自然を保護し、併せて会員相互の研鑽交流の場づくりに取り組む」ことに決定し、活動を開始することになった。

川名緑地と西俣野緑地での自主活動回数は各15日/年の予定を立てたが、実際

には20日／年と計画を大きく上回った。



川名緑地田んぼ復元作業

旧モーガン邸、稲荷の森そして大庭城址公園などの支援活動も展開した。

② 2005年 組織内に事務局を設置

第4期養成講座修了生が新たに加わり、会員数は77名になった。代表が交代し、藤沢市みどり課から事務局機能を譲り受け、担当幹事5名で運営を開始した。

具体的な活動は、自主活動・支援活動・環境教育活動の3本柱とした。

(1) 自主活動

・ 川名緑地

水田復活作業、中谷戸の水系・水源調査などを行い、水生生物調査でヤマトセンブリを確認するなど話題があった。

・ 西俣野緑地

タケノコ堀り、竹炭焼き、コナラ・クヌギのホダ木でシイタケ栽培などを実施した。



炭焼作業

(2) 支援活動

西富憩いの森のビオトープ池、稲荷の森、旧モーガン邸、大庭小ヶ谷、長久保公園、笹窪谷戸整備、丸山谷戸などで活動した。新たに伊勢山公園愛護会の公園整備準備、川名2丁目緑地の保全活動が加わった。

(3) 環境教育活動

植生調査と水質調査の実施ならびに、西俣野緑地で「竹飯の里山サバイバル」を、少年の森では親子参加の「秋を楽しもう」イベントを開催することを決定し、翌2006年に実施した。

③ 2006年 養成講座を自主事業に

第5期養成講座が終了し、会員数は79名となった。川名緑地は4月で休止となったが、保全対象緑地は、新たに市有6緑地が加わり、8緑地となった。これまで藤沢市が主催していた養成講座が終了し、急遽自主事業として運営を始めた。予算上実技中心の講座であった。

藤沢市の「市民自治を推進する」方針を受け、会としての自立性を高めつつ行政との対等な関係を確立するために、「NPO（特定非営利活動）法人化」を図ることを検討した。その準備はじっくりと時間を掛けて行われ、最終的に臨時総会で設立の承認を得て、次年度に設立することを決定した。「花王・みんなの森づくり活動助成金」を活用し「西俣野森づくり」を行った。助成金より、必要機材を購入し、たうえで市民（親子）参加による保全整備作業や炭焼き、記念植樹祭を行うことができた。



花王の植樹祭での植樹作業

4. 大きなチャレンジ

① 2007年 NPO 法人化と協働事業

NPO法人認可は4月3日であった。新しく制定した定款をもとに、法人組織としての運営体制を抜本的に構築し直した。

藤沢市は「協働モデル事業(3年間)」の一つとして市有緑地10カ所の緑地保全活動等を設定し、公募を行った。これに応募し、協定締結を結ぶことができた。



総会風景

この「協働モデル事業(3年間)」は、①緑地保全事業、②里山保全ボランティアリーダー養成講座事業を主要協働モデル事業として位置づけ、他の協働事業として、③支援事業、④里山保全啓発自主事業、⑤緑地保全自主事業(4緑地)、⑤イベント協賛事業(6イベント)という内容であった。

協働事業に関わる予算(人件費、事務局運営費、機材購入費等々)が市から提示され、協働事業運営費として、市税を運用する責任を担うことになった。そのた

めに、予算管理や会計処理において、市への報告を明朗かつ正確に行うよう諸規則を整備し、体制を確立した。



稲荷の森入り口

② 2008年 法人2年目を迎えて

協働事業1年目の課題であった、機材収納倉庫ならびに簡易事務所は、藤沢市みどり保全課により整備され、事業活動に大きく寄与することになった。

事務局ではHPをリリースし、広く広報活動を展開する基礎を築くことができた。

事業体制は里山保全啓発事業を啓発事業と調査事業に分け、主事業体制を4事業体制とした。

緑地保全活動は荒れてゴミ捨て場になっている多くの緑地について、まずはゴミを処理し、その後樹木・竹などの整理に邁進する活動であった。自主活動として「ゴミパトロール」を行い、廃棄ゴミの処理も行った。



荒れた宮前緑地の樹木の整理

支援事業やイベントへの参加拡大も行い、多岐にわたる活動の基礎を固めることができた。長久保公園の市民講座はプロジェクト体制で企画から実施までを担う新しい試みとなった。



長久保市民講座 子どもクラフト教室

③ 2009年 事業の拡大

毎年養成講座の修了生を受け入れ続け、会員数は100名を超える組織に成長した。

最終3年目を迎える協働事業は、計画通りに進捗させることができ、環境調査の本格活動、長久保公園の樹木マップ作りなど新たな事業も加えることができた。

藤沢市ビオトープネットワーク基本計画に基づき創設された小糸台公園ビオトープ池の管理事業が加わり、環境調査事業も内容が変化し、ソフト面での活動が課題となった。



西富憩いの森ビオトープ池補修

次年度以降の新協働モデル事業の公募に向けた準備を行った。

まちづくり協会との間に長久保公園内の整備に関する管理協働事業の協定を締結し、新しい有償事業を始めた。

運営面では役員(理事)の選任方式を養成講座修了期単位毎に数名ずつを選出するやり方に変更し、多くの会員が参画でき、社会の動きに合わせて柔軟に変化できる体制を作った。

5. さらなる発展へ

① 2010年 新協働事業と民間活動

藤沢市の公募に於いて、再び指名を受けることができ、新たな協働事業(3年間)を開始した。新協働事業の柱は次の5事業であった。

- (1) 20ヵ所の緑地保全
- (2) 養成講座の継続
- (3) 指定緑地の環境調査
- (4) 緑の普及啓発
- (5) 市民活動等支援

養成講座第10期講座の募集では受講定員枠の3倍となりうれしい悲鳴を上げた。抽選で25名の受講生を受け入れることとした。



第10期養成講座 西俣野

自主事業として、従来から支援対象の長久保公園での活動を増やした。新たに民間緑地である東レ社の緑地保全活動を開始した。これは請負契約による有償事業で、初の収益事業となった。

藤沢市にとって初の企業と行政の協働事業であるアズビル社の西富第2緑地保全活動への支援も開始した。

② 2011年 普及啓発・市民活動支援

2年目の協働モデル事業において、東西南北4地区制での緑地保全事業を継続した。養成講座事業は25名が受講し、24名の修了生が加入した。普及啓発事業、市民活動支援事業也多岐にわたり、幅広い活動を展開した。

また、各公民館と連携し、地域に密接する活動への準備を始めた。東レ社事業に続き民間緑地の池上通信機社が有償事業に加わった。

会員の実務技術向上に向けたステップアップ講座をスタートさせた。



第1回ステップアップ講座



長久保公園倉庫改造の当時の作業所

② 2012年 新たなあり方の検討

NPO法人としての自立に向けた収益確保や市民への啓発をはじめとした多岐にわたる役割を果たす必要があることなど、諸課題を明確にしたうえで、NPO法人としてのFGSのありかたを再検討しつつ、具体的な活動を実践していくことが望まれた。

6. 新たな時代へ

① 2012年 ポスト協働モデル事業模索

第2回協働モデル事業(通算6年目)は最終年度を迎えた。これまでの活動により緑地ごとの特性が把握され、次の協働モデル事業に向けて、緑地ごとの具体的な活動を明確にする取り組みを進めた。各事業について新スキームの構築を図るべく検討を行った。



その後の10～20年概況

(事業別に記載)



FGSの象徴であるベスト

第1章 緑地保全事業

1. 活動の概要

藤沢市との3ヵ年ごとの基本協定に基づく協働事業の継続により、最大の柱である緑地保全事業の協定緑地は、20ヵ所から23ヵ所(石川鍛冶山緑地、片瀬山憩いの森、川名清水緑地)へ拡大した。活動日数は40日から50日を超え、活動参加人数はおおむね900人から1,000人を維持してきた。

2. 基本協定(3ヵ年)ごとの活動概況

① 2010～2013年 20ヵ所で活動

2010年に開始した協働事業は例外的に1年間延長されて4ヵ年となった。

藤沢市の緑地管理体制との整合を図るため、指定緑地20ヵ所での活動を東西南北の4地区に区分し、それぞれに地区リーダーを置く体制を継続して、保全活動を運営した。活動日数は40日を維持し、延べ活動人数は960人前後となった。

周辺住民とのコミュニケーションを図る目的から、唐池緑地での住民アンケート活動を実施(資料添付)し、片瀬山5丁目石切り場跡緑地では住民見学会を実施した。大庭小ヶ谷緑地で保全活動への住民参加を実現した。

機材整備グループを創設し、会員が分担して機材の整備を行う体制とした。

② 2014～2016年 生物多様性対応

活動日数40日、延べ活動人数960人の活動を継続した。定期的な緑地パトロールに加え、台風通過後の臨時パトロール活動を実施した。

複数の緑地で、生物多様性の確保を目指し、発生材を活用した「カントリーヘッジ」、「落ち葉溜め」の設置に取り組んだ。



大庭小ヶ谷・落ち葉溜め



稲荷の森・カントリーヘッジ

稲荷の森では巣箱を設置、大庭遊水地では湿地性植物育成に向け、新たに木道周辺で水辺整備、土壌移設も行った。

③ 2017～2019年 22ヵ所に増加

協定緑地は石川鍛冶山、片瀬山憩いの森が追加され22ヵ所に拡大した。延べ活動人数は2017年に1,000人を超えた。2019年後半はコロナ対策で活動中止を余儀なくされたが、活動日数は50日に近づいた。

複数の緑地で間伐材を活用した散策路整備を行った。





稲荷憩いの森・散策路整備

市民が散策する緑地では樹木銘板を設置した。大庭遊水地では繁茂したアレチウリ除去のため臨時保全作業を実施した。

近隣の大学から活動への参加要望があり、保全作業への学生ボランティアを受け入れた。



川名清水緑地・蓮田となった休耕田整備

また、同緑地においては、2021年2月の調査でニホンアカガエルの産卵による卵塊を276個確認した。他団体の資料と照合し、増加していることが分かった。生物生息環境改善を行った2年間の湿田化回復作業による成果であった。

④ 2020～2021年 23ヵ所に拡大

協定緑地は川名清水緑地が追加され23ヵ所に拡大した。



川名清水緑地・休耕田を湿田化する作業

追加された川名清水緑地では、従来の除草、枝払い、倒木処理、園路整備などの緑地保全作業ではなく「谷戸の自然環境保全」を目的とした生物多様性の実現をめざす新たな活動に踏み出した。鍬とシャベル、三角ホウを使用した人力作業で年間を通して活動を行い、休耕田の湿田化回復作業に取り組んだ。



ニホンアカガエルと卵塊

2021年に、「藤沢市生物多様性地域戦略」の実現を目指し、川名清水緑地における休耕田を含めた緑地全体の自然環境保全再生作業に取り組むために「川名清水緑地調査プロジェクトチーム」を立ち上げた。「水源水質及び植物・生物調査」、「歴史、地質調査」について、近隣の郷土史家、住職、環境調査研究者など専門家の協力を得て、1年間の調査研究活動を行い、FGSの今後の新たな方向性を示すことができた。

3. 今後の課題

① 市民と連携した緑地保全活動

各緑地での取り組みの事例のなかで、大庭小ヶ谷緑地における周辺自治会とのコミュニケーションが最も円滑に進んでいる。東部・南部では保全作業に関わり、近隣の公園愛護会との連携ができつつある。今後も市民・市民団体との連携を強化・拡大していく。

② 新たな視点での緑地活動計画の策定

長年にわたる活動で、各緑地の状況は大きく改善してきている。今後は、指定緑地を各々の特性を考慮し大まかに二つに区分する。市民利用が可能な緑地は、安心・安全、快適に散策できる緑地を目指す。また市民が立ち入りできない緑地は、多様な生物が生息できる環境保全を目指す。そのために、緑地特性をふまえた上で、従来の活動計画を見直し、活動目標・回数・参加人員・活動時期など、個別に作業計画を策定する。

③ 次期3ヵ年協働事業に向けての準備

単に各緑地の維持管理作業を行うのではなく、生物多様性など自然環境保全の取り組みを充実していく。緑地ごとの将来像を描き、具体的な姿や保全方法などについて、市に提案していく。

④ 組織内の課題

(1) 機材倉庫の設置(運搬作業の軽減)

市街化区域・市街化調整区域それぞれの基準を満たす主要機材倉庫の設置を検討し、条件を満たす数か所の緑地において試験的な設置を図る。

(2) 年間を通じた緑地環境の維持

機材倉庫あるいは簡単な機材保管用のコンテナの設置を前提に、毎月の定例日に会員が自主的に活動する緑地を数か所選定し、年間を通して良好な環境を維持できる取り組みを進める(公園愛護会活動のイメージ)。



川名清水緑地の機材保管用コンテナ

(3) 安心安全のための諸機材の充実

女性及び高齢会員が増えている現状を考慮し、安心・安全に緑地内で活動できる条件を整えていく。具体的には、川名清水緑地で試行した仮設トイレの設置(活動日のみ)やチェーンソー、刈り払い機などの動力機械をエンジン式と並行して電動式機器の導入を進めていく。



川名清水緑地活動日の仮設トイレ

唐池緑地 アンケート

対 象:善行二丁目、唐池緑地周辺住民

実施期間:2012年7月17日～31日

アンケートの内容・結果

回収率:57%(21件中12件)

質 問 内 容	回答数
1. この緑地をどのようにしていきたいですか	
ア. 現状のまま	6
イ. 樹木を間伐し、もっと明るく	6
ウ. 散策路が必要	1
エ. 草花を増やす	3
オ. その他	0
2. この緑地に興味はありますか	
ア. あり	11
イ. なし	1
3. 今までに緑地を使用したことがありますか	
ア. あり	6
イ. なし	6
4. FGSの活動に参加希望はありますか	
ア. あり	3
イ. なし	8
ウ. わからない	1
5. 現在、地域住民での緑地愛護会的な活動をしていますか	
ア. あり	0
イ. なし	11
ウ. わからない	1

住民からの意見

- * 自然が身近にあるのは良いが、近すぎて落ち葉や花粉がひどい、家から数メートル以内の高木は伐採して欲しい
- * 伐採樹木をなぜ放置したまま整理しないのか、こどもの火遊びで燃えたことがあるので心配です
- * 伐採した木材が残っていますが、蜂の巣になっていないか心配です
- * 伐採していますが、樹木の種類がわかっているのですか、楽しませてくれる樹木もありますので
- * 屋根にかかる樹木の伐採はありがたいが、樹木はできるだけ残して欲しい
- * 落ち葉に放火されたことがあることをご存じでしょうか
- * 樹木は必要以上に伐採しないで欲しい、こどもたちが自然に触れ合う機会を与えたいので
- * 自然を生かした緑地にして欲しい
- * 高木は低くして欲しい

4. 活動実績

年度 年	協定緑地数 ヵ所	活動日数 (自主活動を除く) 日	参加者 人	備 考
2012	20	44	953	雪害対応7回の臨時作業参加者数を含む
2013	20	44	969	定期パトロール、臨時作業合計20回の参加者数を含む
2014	20	44	946	3回の臨時作業参加者数を含む
2015	20	44	922	大庭小ヶ谷緑地3回24人の臨時作業を含む参加者数
2016	20	44	874	善行2丁目緑地2回25人、稲荷の森2回13人、亀井野緑地1回8人、大庭遊水地1回16人、本町1丁目緑地1回2人、大庭小ヶ谷緑地1回11人の臨時作業を含む参加者数
2017	22	49	1,044	善行2丁目緑地、大庭遊水地の臨時作業33人を含む参加者数
2018	22	49	978	
2019	22	49	952	
2020	23	28	564	大庭小ヶ谷臨時作業2回15人、川名清水緑地見学会1回20人、調査1回20人を含む参加者数
2021	23	52	985	大庭小ヶ谷臨時作業1回9人を含む参加者人数



第2章 養成講座事業

1. 活動概要

養成講座を毎年継続的に開催・運営し、その修了者を迎え入れることは、会を存続させ、活動目的を実現していくための最重要課題であるとの認識で活動してきた。そのために、講座内容について、過去のカリキュラムを踏襲しつつも、諸要請や社会情勢の変化に対応しつつ、毎年創意工夫を重ねてきている。

講座日は、月1回・年間13回を設定してきた。基本講師は会員の他、東京農工大学・木平勇吉名誉教授、日本大学・井上公基名誉教授、日本大学・杉浦克明准教授、日本大学・上村真由子准教授、日本大学・園原和夏専任講師、湘南グリーンサービス・富田改代表のご協力を頂いてきた。講義による机上学習のみならず、現場での見学・実習も多く取り入れてきた。

この10年間、市との協働事業の柱として毎年開講を続け、その企画運営を担ってきた。コロナ禍のなかでも安全に最大の配慮を行い、休講は最低限で乗り切ってきた。2021年現在、受講生は累計191名、修了者の累計は180名となった。

2. 経年の活動概況

① 2012～2014年 安全対策を強化

緊急時の安全対策を目的に、2012年より藤沢消防署から講師を招き救急救命講習会を開催し、AEDの使用方法を学んだ。普通救命講習修了証を発行した。

2014年から樹木観察・CO₂実測等の講義は日本大学・杉浦先生が担当になった。

実習補助として日本大学の学生も参加した。

2014年より、安全対策のため刈払機やチェンソーなどの動力を用いる機械作業実習をカリキュラムから除外した。入会後に安全講習を受講したうえで、実技訓練・知識試験を行い、使用資格を取得してもらうことにした。



講座風景(長久保公園研修室)

② 2015～2017年 鳥類観察を加える

2017年度より、みどり保全課職員を講師に招き、保全活動実践事例として「稲荷の森」の取り組みを講座に加えた。自然環境のテーマに鳥類観察を加えた。ビオトープ講習・水質検査の講座は入会後必要に応じて学習してもらうこととして除外した。



第17期生 ワークショップ(大庭東町内会館)

③ 2018～2020年 名称変更

机上学習のみならず現場学習を充実するために、初代養成講座講師の富田代表が活動するエビネ・やまゆり園(遠藤)で見学・講習会を実施した。大庭持瀬での協働事業活動現場を見学し、作業にも参加した。

ワークショップの対象緑地を大庭持瀬に固定し継続することを決めた。

2019年に、提出課題の対象範囲を植物図鑑から生物図鑑に広げた。

入会后、養成講座運営スタッフの一員として初年度サブリーダー、その後リーダーを担当する運営体制を確立した。

2020年に、カリキュラム内容の実態が「ボランティアリーダー養成」という名称と合致していないため、市と協議し「里山ボランティア養成講座」に名称変更した。リーダーの養成については明確に入会後の課題となった。

クラフト講座の講師を普及啓発事業担当から養成講座事業担当に変更した。

コロナ対策のためカリキュラムを大幅に変更した。開講式は大鋸事務所で2部制とし、緑地バス見学は中止とした。市に各講座の会場予約を依頼した。救急救命講習会は集合講座を中止し、各自がそれぞれの場所で受講してもらった。



2020年大鋸事務所でのオリエンテーション

④ 2021年 受講生増とコロナ対策

自然観察地の対象を新林公園に変更した。鳥類観察は半日講座として、より深く学べる時間を確保した。

緊急事態宣言により対面学習が不能になり、課題提示で自宅における外部講師のビデオ講義を実施してもらった。

養成講座募集の市広報スペースが大幅に拡大されたことなどにより、コロナ禍にも関わらず、近年にない応募者数となった。受講者数を25名に増やしたものの、講座会場確保に苦労した。

受講者数が増え、全受講者に目を配ることが難しくなったため、受講者にはオレンジ色のベストを着用してもらうことにした。ワークショップは、講座スタッフが受講生のグループ討議に参加して進行を補助する仕組みとした。



大庭持瀬の活動見学講座

4. 今後の課題

① 20名以上の受講生の確保

今後も毎年20名以上の受講者を確保すべく、市と連携し広報における募集を充実していく。あわせて様々な広報媒体を利用し応募者を確保に努める。

② 受講生の変化への対応

近年の傾向は、10代及び20代の応募者が増え、大学生の受講生も誕生している。また、50代後半から60代前半ならびにさらに若い受講生や女性の受講生が確実に増えてきている。こうした応募者の多様化に合わせて、従来のカリキュラム構成

などについて、新たな検討が必要になってきている。

③ 入会後のフォローアップ

必要な講座の開設を他の事業部と連携して検討していく。

ワークショップ

第1回養成講座より継続しているプログラムのひとつ。テーマは「里山を将来にわたってどのように管理維持していけばいいのか?」。課題緑地について、自分の目で見、観察し、感じ、調べ、考え、グループで話し合い、自分たちの結論を導く。その後、他の受講生にわかるように表現し発表する。課題緑地は、緑地活動に活かす目的から、「稲荷の森」「稲荷憩いの森」「西富憩いの森」「宮前緑地」「大庭持瀬」と変更してきている。

マイ生物図鑑(旧マイ植物図鑑)

受講生各自がテーマを設定し、オリジナル図鑑を作成する。生物多様性への対応に伴い、植物だけでなく生物も含めた内容にバージョンアップし、名称も変更した。美しい手書きスケッチに加え、パソコンを駆使した力作も多く見られるようになってきている。優秀作品についてはHPに掲載し、会員に開示している。提出された図鑑を、実際の保全活動に活かしていくことが今後の課題である。



5. 活動実績

年度 年	受講者数 人	講座数 日	修了者数 人	ワークショップ対象緑地
2012	15	14	15	西富憩いの森
2013	15	13	13	稲荷の森
2014	17	13	17	西富憩いの森
2015	16	13	14	宮前緑地
2016	14	13	14	稲荷憩いの森
2017	12	13	12	大庭持瀬
2018	10	13	9	大庭持瀬
2019	9	12	7	大庭持瀬
2020	8	10	7+2(留年)	大庭持瀬
2021	25	12	20	大庭持瀬



第3章 環境調査事業

2010年から協働事業として、植生調査、水質・水生生物調査、ビオトープ管理の3つの柱で活動を展開してきた。活動結果について、他の事業活動に結びつけるべく努力してきている。

1. 環境調査(植物、昆虫、野鳥他の生物)



環境調査風景

① 活動概要

各指定緑地における保全目標設定の基礎資料とするため、植生調査を中心に実施し、緑地保全活動に反映してきた。

調査方法は緑地全体を対象とするフロラ法(調査ルートに沿って出現する植物種名を記録する)、対象緑地内の特徴ある区域を選定し階層別に調査するブラウン・ブランケ法を採用してきている。

植生リスト記録用紙、記入方法を決め、植生リストはExcelに入力し管理してきた。

年間管理緑地および憩いの森では樹木マップの作成や、主だった樹木に樹木銘板を取り付けてきた。

② 経年の活動概況

(1) 2012～2013年 植物保護強化

環境調査協働事業として指定緑地20カ所の植生調査を始めた。当該指定緑地

の保全作業の1ヵ月前に調査を実施するとともに各緑地保全作業の下見の際に参加することとした。竹柵等で囲いを設け希少植物の保存を促すなどの対策を開始した。

(2) 2014～2016年 名称変更

緑地ごとの過去の植物リストをもとに、観察時期をずらし出現種の季節変化を把握できるよう活動回数を増やした。

緑地の自然環境を把握するため植物調査に合わせて昆虫、野鳥等を追加した。

2016年から植物調査の名称を環境調査に変更し、植物調査班と昆虫調査班に分かれて活動を開始した。

東西南北の各地域に環境調査サブリーダーを置き下見等に協力することとした。

(3) 2017～2019年 対象緑地見直し

2017年に指定緑地が2カ所追加され22カ所となった。新たに、環境調査参加要領を作成した。環境調査日程を月曜日または土曜日とし、植物および昆虫・野鳥などを含めた内容で22緑地において24回実施した。

2018年、必要性の視点から月2回の調査を見直し、月1回調査に減らした。

2019年、指定緑地22カ所のうち選定した10カ所のみで実施することに変更した。

(4) 2020～2021年 コロナ対策

2020年、川名緑地が協働事業に追加されたが、環境調査は従来の22緑地で実施することとした。川名清水緑地の環

境調査については川名プロジェクトチームで行うこととした。

22緑地のうち選定12ヵ所での活動を計画したが、コロナ対策のため数回の活動を中止せざるを得なかった。

③ 活動の成果

過去の植物調査リストを整理し、2009年から2021年までの12年間の調査結果を Excel でデータベース化した。

指定緑地内での外来種駆除を行ってきているが、成果の測定が難しい。

外来種駆除対象植物

セイタカアワダチソウ、トキワツユクサ、ヒメヒオウギズイセン、イモカタバミ、ツルニチニチソウ、アレチウリなど。

指定緑地内で竹柵等による希少植物の保護、樹木銘板の取り付けを継続してきた。一定の成果を得ている。

指定緑地内の希少植物

(市自然環境調査の指定 16 種)

アキザキヤツシロラン、イラクサ、エビネ、オカトラノオ、オケラ、キンラン、ギンラン、シュンラン、セントウソウ、チゴユリ、マヤラン、ノハラアザミ、ハンゲショウ、ホタルカズラ、ミゾホウズキ、ヤマアジサイ



キンラン



ギンラン



ホタルカズラ



ヤマユリ

④ 今後の課題

Excel でデータベース化した植物調査等の結果を緑地保全や普及啓発活動などにどのように反映するかを検討する。

調査内容を充実させ、かつ円滑に行うために外部の専門家を講師に招いた講座の開催も検討する。引き続き、植物を同定できる会員の育成を図る。

緑地保全作業の際に、希少植物を誤って刈り取らないための対策を強化する。

市が委託する業者が作業する際にも、希少植物が刈り取られないように、竹柵などを設置したうえで、市から業者に徹底を求めている。

市民が散策できる憩いの森、稲荷の森について、緑地の状況や生物の分布がわかる緑地マップの作成や植物名の銘板の取り付けなどを行い、市民が里山の自然環境を守り親しめる環境を作っていく。

2. 小糸台ビオトープ管理

① 小糸台ビオトープ開設の経緯

2007年の「藤沢市ビオトープネットワーク基本計画」策定に伴い、2008年3月に最初に整備されたのが「小糸台ビオトープ」である。

小規模ながら良好な樹林地が残る小糸台公園の一角に、3つの小さな池が作られ、池の傍らには小規模の崖地形があり、池には斜面緑地から雨水が流れ込む地形である。これらの池はⅠ池、Ⅱ池、Ⅲ池の順に、上流から大中小の池が連なる。

整備後、2013年3月には池の給水用の井戸が掘られ、2014年1月からは電源設備が改良され、給水がタイマーにより管理できるようになった。開設当時から月に1度、管理と経過観察調査を継続してきている。

② 活動概要

小糸台公園内のビオトープ池(3カ所)周辺の観察、池の水位、水質、水温、透明度、泥溜層を測定し記録してきた。池周辺の外来種・つる性植物、落ち葉の除去と公園内の清掃も行ってきた。

植物・生物等を公園内に「持ち込まない、持ち出さない」を原則とする市のビオトープ基本計画に基づき、生物多様性推進のための資料を作成してきた。

③ 経年の活動概況

(1) 2012～2013年 たいへんな作業

2012年には、ニホンアカガエル・アズマヒキガエルなどカエルの卵の増加を確認した。



ニホンアカガエルと、ヤマアカガエルの卵塊

定例の活動日以外に池の泥さらい作業を実施した。池の水を汲みだし、スコップ、手製の鋤簾で泥をすくい水切り用網で水を切った泥を土嚢袋に入れ池の山側に積み土留めとする作業であった。



泥さらい作業

終了後は、池に水を給水し、アメリカザリガニは駆除し、水生生物は池に戻した。

当初は、渇水対策として3池のパトロールを行い、水道水の給水作業を行っていた。その作業は、3池の水が満杯になるまでに何時間もかかり、大きな負担となっていた。

2013年にⅠ池脇にポンプ配水する井戸が設置され、2014年にはタイマーでの給水が可能となり、作業は大きく改善された。



設置された井戸

2013年7月にはメダカ、カダヤシを確認し、8月には池の泥さらいを実施した。「ビオトープは、いま」と題した掲示板に写真などを掲示し、ビオトープの理解と啓発に努めた。

(2) 2014～2016年 生物状況の変化

2014年にはアズマヒキガエルの孵化を確認したが、アカガエルは1匹のみしか確認できなかった。卵塊が確認されていないのはタイマーによる自動給水の影響と考え、給水時間の調整を行った。8月には池の泥さらいを行った。

2015年にアズマヒキガエルの卵塊4個を確認したが、アカガエルの卵塊は確認できなかった。8月に泥さらいを行った。9月にⅠ池～Ⅲ池にロープ柵が設置された。

2016年にもアズマヒキガエルの卵塊4個を確認したが、アカガエルの卵塊は確認されなかった。10月に池の泥さらいを行った。12月にⅠ池周辺にヨシ、ヒメガマ、オモダカ、セキショウが植えられビオトープ池らしくなった。

(3) 2017～2019年 カエルが不在に

2017年、アズマヒキガエルの幼生が確認されたが、アカガエルの卵塊は確認

できなかった。池の泥除去の効果は見込めないと判断し作業を中止様子を見ることとした。

2018年にはアズマヒキガエル・アカガエルの卵塊双方が確認できず。4月末に、Ⅲ池の付近のシラカシ、アラカシ、アカガシ4本を台場切りし、その資材を使用してカントリーヘッジと落葉溜めを設置した。

Ⅰ池はビオトープ池らしくなり、Ⅱ・Ⅲ池にも日光が入るようになった。

2019年にもアズマヒキガエル・アカガエルの卵塊は確認できず。レーキを使用してⅡ・Ⅲ池の落ち葉、泥の除去を行った。

(4) 2020～2021年 泥除去作業中止

池の水質等の検査(水温、水位、泥溜層、透明度、pH, COD)を実施した。

池の水生生物は、目視と、たも網を使って捕獲、メダカ、ヤゴなどは確認後に池に戻した。アメリカザリガニは駆除した。ビオトープ池周辺の植物調査を行った。

池の泥さらい作業を中止し、ビオトープ環境に変化があるか経過を観察した。池および周辺の環境整備のため、落葉、落枝、つる性植物の除去と公園内の清掃を実施した。

④ ビオトープ池の現状(2022年3月)

落葉が溜まり、泥が多く、透明度が低い。Ⅱ・Ⅲ池の透視度は30cm 以下、pH 7、COD は6とこの時期にしては高め、DO は2ppm以上で問題はなかった。確認された水生生物は、アメリカザリガニとメダカのみとなった。

過去に確認された生物

アズマヒキガエル(卵塊、オタマジャクシ)、トウキョウダルマガエル、ニホンアカガエル(オタマジャクシ)、ヤマアカガエル(卵塊)

アメンボ、ガムシ、ミズスマシ、ミズムシ、ヤゴ

カダヤシ、クロメダカ、ヒメダカ、メダカ、ドジョウ、モツゴ、カニ、

カワエビ、ヨコエビ、モクズガニ、アメリカザリガニ

カワニナ、サカマキガイ



ヤゴとメダカ

水生生物調査では池内の生息生物の種類同定、観察を行い、マダラガガンボ、クロスジヘビトンボなどの幼虫、ヤゴ、カワニナ、サワガニの生息を確認してきている。



水質検査風景

② 身近な水環境全国一斉調査への協力

引地川、親水公園、大庭遊水地の水質調査を年3回実施し、国土交通省・環境省に報告を行ってきた。

③ 今後の課題

これまでの調査では大きな変化は見られないが、今後とも自然環境保全と生物多様性保持のため、地道かつ継続的に、市内の湧き水等の水質および水生生物の調査活動を継続していく。

⑤ 今後の課題

今までのビオトープ管理活動について一定の評価を行いつつも、今後の継続の仕方については、市と協議を行うこととした。

3. 水質・水生生物調査

① 活動概要

大庭遊水地、稲荷持瀬、大庭持瀬にて継続的に水質・水生生物調査を行ってきた。

水質調査内容は、透明度、COD パックテスト、pH、などに、COD、NO₂、NO₃、PO₄、NH₄も追加してきた。



環境調査結果から作成したデータベース例

環境調査で調査ルートに沿って出現する植物種名を記録する。

Excel の表に入力、種名をチェック修正し、五十音順のリストを作成、日報に載せる。

Excel で作成した植物リストを基に「FGS環境調査データ」を作成する。

FGS 環境調査データ

FGS環境調査データ													
No.	緑地名	調査日	種名	記載	状況	記号	開花、△:結実	年	月	年度	地区	科	分類1
1	片瀬山石切場跡	41419	アオキ	アオキ				2013	5	2013	南	ミズキ科	木
2	片瀬山石切場跡	41419	アオツツラフジ	アオツツラフジ				2013	5	2013	南	ツツラフジ科	木
3	片瀬山石切場跡	41419	アカネ	アカネ				2013	5	2013	南	アカネ科	草
4	片瀬山石切場跡	41419	アカメガシワ	アカメガシワ	幼			2013	5	2013	南	トウダイグサ科	木
5	片瀬山石切場跡	41419	アケビ	アケビ				2013	5	2013	南	アケビ科	蔓
6	片瀬山石切場跡	41419	アズマネザサ	アズマネザサ				2013	5	2013	南	イネ科	草
7	片瀬山石切場跡	41419	アマチャヅル	アマチャヅル				2013	5	2013	南	ウリ科	草
8	片瀬山石切場跡	41419	アマドコロ	アマドコロ				2013	5	2013	南	ユリ科	草
9	片瀬山石切場跡	41419	アラカシ	アラカシ				2013	5	2013	南	ブナ科	木
10	片瀬山石切場跡	41419	アレチギンギン	アレチギンギン				2013	5	2013	南	タデ科	草
11	片瀬山石切場跡	41419	イタビカズラ	イタビカズラ				2013	5	2013	南	クワ科	草
12	片瀬山石切場跡	41419	イチゴツナギ	イチゴツナギ				2013	5	2013	南	イネ科	草
13	片瀬山石切場跡	41419	イチヤクソウ	イチヤクソウ	開花直前			2013	5	2013	南	イチヤクソウ科	草
14	片瀬山石切場跡	41419	イヌシデ	イヌシデ				2013	5	2013	南	カバノキ科	木

環境調査結果を加工し、「活動緑地 植生データ(2007 年～2021 年)」を作成する。

FGS 活動緑地 植生データ(2012～2021 年)

分類	種名	東					西					南					北					
		西富憩いの森	天嶽院緑地	田村の杜	本在寺緑地	本町1丁目	稲荷の森	稲荷憩いの森	大庭小ヶ谷	大庭遊水地	裏門公園	宮前緑地	片瀬山1丁目	片瀬山岩屋不動	片瀬山憩いの森	片瀬山石切場跡	稲荷持瀬	亀井野緑地	石川鍛冶山	善行2丁目緑地	大庭持瀬	唐池緑地
自生種																						
常緑木本(高木)	アカガシ	○	○		○			○				○									○	○
	アラカシ		○		○		○	○				○	○		○	○			○			
	シラカシ	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○		○	○			○	○	○	
	スダジイ	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○		○	○			○	○	○	
	タブノキ	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○
	モチノキ	○	○		○	○		○	○		○	○	○		○	○		○	○	○	○	○
常緑木本	アオキ	○	○	○	○	○	○	○		○		○			○	○			○	○	○	○
	アオキcv.								○													
	アオダモ														○							
	イヌガヤ				○	○											○					
	イヌツゲ	○	○		○		○	○	○			○			○	○		○	○	○	○	○
	イヌマキ		○		○						○	○			○	○			○			
	オオバグミ											○			○							
	カクレミノ	○	○		○			○	○			○	○		○	○		○	○			

環境調査データを加工し、活動緑地ごとに過去の調査年月の表を作成する。

片瀬山5丁目石切り場跡緑地

分類	種名	2010	2011	2012	2013	2016	2016	2017	2019	2021
		9月	7月	6月	5月	5月	10月	5月	2月	11月
常緑木本(高木)	アラカシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	シラカシ	○	○	○	○		○		○	○
	スダジイ	○	○	○	○		○	○	○	○
	タブノキ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	モチノキ	○	○	○	○	○	○	○	○	

4. 活動実績

環境調査活動実績

年度 年	活動回数 回	活動人数 人
2012	7	69
2013	8	77
2014	15	133
2015	14	129
2016	13	152
2017	22	243
2018	12	164
2019	10	139
2020	7	91
2021	7	81

水質・水生生物調査実績

年度 年	活動回数 回	活動人数 人
2012	3	資料なし
2013	3	資料なし
2014	3	10
2015	3	11
2016	3	12
2017	3	13
2018	3	14
2019	2	11
2020	3	11
2021	5	19

小糸台ビオトープ管理活動実績

年度 年	活動回数 回	活動人数 人
2012	12	52
2013	12	55
2014	12	57
2015	12	56
2016	12	54
2017	12	46
2018	12	52
2019	9	43
2020	3	12
2021	5	20



第4章 普及啓発事業

1. 活動概要

5項目の基本方針のもと、協働事業を展開しつつ、自主活動も拡大してきた。

- ① 藤沢の子どもたちに自然や緑地の大切さを教える。
- ② 一般市民の緑地保全活動を含めた自然・みどりへの理解を高める。
- ③ 里山からの恵みを利用した工作物のもとに、緑の普及啓発を行う。
- ④ 各種イベントへ参加し、会の諸活動についても紹介する。
- ⑤ ものづくり体験のための新しい工作物を創作する。

2. 経年の活動概況

① 2012～2013年 協働事業のみ

長久保公園の春秋のまつりで、体験型イベントを行い、ドングリ人形・松ぼっくりビーズ・竹万華鏡等を作成した。合わせてFGS活動のパネル展示を行った。

夏休みには竹馬作り、晩秋にはクリスマスリース、ミツロウのロウソク作りなど季節に応じたものづくり体験企画を実施した。



松ぼっくりビーズ



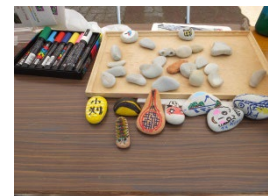
クリスマスリース



ミツロウのロウソクづくり



竹馬の試乗



お天気石のお絵かき

学生たちがNPOを知り、興味のある活動を探るNPO見本市に参加した。

ふじさわ環境フェアに参加し、FGS活動を紹介するためのパネル作成を行い、ものづくり体験の場を提供した。

② 2014～2017年 自主事業開始

(1) 協働事業

これまでの活動を継続しつつ、生物多様性への取組みとして、各地の講習会・イベントに多数参加し、藤沢の緑地の大切さを継続的に子どもたちに伝える活動を強化した。

具体的な活動場所は次のとおり。

- ・ 長久保公園
- ・ 親水公園まつり
- ・ 太陽の家まつり

各支援事業とのタイアップした活動を開始し、CSR活動を展開する企業に勤務する社員とそこそご家族に対して、森のなかでのクラフトづくり体験の場を提供した。

具体的な支援先は次のとおり。

- ・ アズビル社(2013年～)
- ・ NSK社(2017年～)

竹馬作り製作手順、竹馬試乗方法と検定、万華鏡製作方法などについてマニュアルを作成した。

(2) 自主事業の立ち上げ

2016年に「FGS少年の森プロジェクト」を立ち上げ、少年の森にて本格的な里山保全活動を開始する。活動の開始にあたり提案した内容の骨子は次のとおり。

- ・子どもたちが、自然に触れ合う楽しさを五感で感じられる場を醸成する。
- ・多様な生命が生きていることがわかり、発見できる場とする。
- ・森全体のゾーニングを行い、それぞれの将来の姿を描く。

こうした提案はほぼそのまま受け入れられ、景観林、湖畔林、古道散策路、アオキ迷路散策路、明るい森、観察の森、大クスノキ広場、探検の森、自然放置林といったゾーンごとの管理と活動を継続している。

2017年、普及啓発の自主活動として「第1回 ふじさわ子ども森の探偵団」を開催した。少年の森(藤沢市みらい創造財団)に場所の提供協力を頂くことができ、計画・募集・保険加入・受付・案内・実施の全ての活動を自ら行うはじめての自主事業となった。



森の説明を受ける子どもたち



焼き芋を楽しむ

少年の森活動計画報告会を開催した(市公園課、藤沢市みらい創造財団、会員参加)。

FGSイベントベスト・帽子、ふじさわ子ども森の探偵団旗製作、ふじさわ子ども森の探偵団推進マニュアル作成などを行った。

ふじさわ子ども森の探偵団を自主活動の中心とし、「森の保護活動」はその活動のために、子どもたちが森の中で自由に安全に遊べる環境を整えるための活動として捉えた。

「森の保護活動」においては、枯木・倒木の伐採、スポーツ広場の枝の伐採・危険植物の除去等を進めてきた。



伐採後のヒノキ



玉切り作業中

③ 2018～2019年 充実・拡大

FGS紹介パネル全体図作成、里山のジオラマ作り、木の実の標本のリニューアル、ミニ標本作り、シュロバッタ作りなど、活動内容は一気に充実した。

引地川親水公園まつりでは丸太切り体験(台製作)、仕上げ、穴開け、お絵かき、(一気通貫体験型イベント)、外来種駆除体験などを実施した。

太陽の家まつりは、施設と連携しクラフト会を開催した。

外部への情報発信として、各事業のPRパネルを改訂して、環境フェアに参加した。同フェアにおいては、クラフト講座を開催し、子ども向けのお土産を用意した。

④ 2020～2021年 コロナ対策

コロナ対策のために多くのイベントが中止となった。感染対策を取ったうえで、規模を縮小もしくは内容を変更して一部のイベントを継続開催した。

(1) 協働事業

2020年、長久保公園では、秋の緑化推進まつりが変更となり、新企画である「ながくぼハロウィン」に特別参加し、クラフトの製作体験イベントを行った。

定例の竹馬作り・クリスマスリース・ミツロウのロウソクの製作体験は実施することができた。

環境フェアは市役所のパネル展示に参加した。市の職員により動画も撮影された。

(2) 自主事業

少年の森の保護活動(ナラ枯れ対策、植物調査)を継続実施した。

公民館におけるクラフト作成、緑地観察会等の活動の拡大を図った。明治公民館で「竹馬・竹ぽっくり作り」を行い、長後公民館では、「春をさがそう・生き物さがし」、大庭公民館では「裏門公園を探索しよう。冬の鳥・植物を観察しよう」を実施した。



環境フェアの展示風景

3. 今後の課題

- ① 自主事業の継続的な推進と新たな自主事業の展開を図る。
- ② 他事業と連携して活動の外部発信を強化する。
- ③ 子どもたち及び一般市民にさらに親しまれるイベントを工夫し開催する。
- ④ イベントに提供する楽しく魅力ある新たなクラフトを開発する。



少年の森活動に至る経緯

2016年、新たな活動フィールドとして藤沢市少年の森に着目して、近隣の会員が自主的に調査を行った。1980年に少年の森が開設され以降、森の手入れは殆ど行われないうまま約35年が経過していたため、当時の森の中は、風倒木が多く子ども達が安心して入ることが難しい状態であった。こうした状況をふまえ、少年の森と打合せを行った結果、FGSとして整備協力を行うことになった。

活動にあたっては、少年の森が藤沢北西部にありアクセスに時間が掛かることから、森の中で弁当を食べ1日作業とし、敷地内に倉庫を設置するなどの工夫を行った(通常午前中のみの活動)。

少年の森は、本格的な里山保全活動が可能な緑地であり、藤沢市内で唯一火を使える施設(炊飯・キャンプファイヤー・たき火等)でもある。現在、伐採・チェーンソー技術・伐採枝落とし等の保全技術習得のための研修を実施する重要な場になっている。また、「ふじさわこども森の探偵団」においては、落葉での焼き芋体験が行うこともできている。

自然を大切にしたい森・子ども達のための森を目指し、大人になった時に“小さい頃この森で良く遊んだものだ”と思い出になるような森作り、遊び場作りをしていきたい。

4. 活動実績

年度 年	活動日数 日	参加人数 人	備考
2012	不明	不明	
2013	不明	不明	
2014	15	136	
2015	19	143	
2016	20	181	
2017	16	181	
2018	15	144	
2019	16	151	
2020	10	92	コロナ
2021	17	157	



第5章 支援事業

1. 活動概要

緑地を管理・保全する団体等の要請に基づき、保全作業そのものを肩代わりして実施する形態と、同様な活動を望む企業などに対し技術指導を行いつつ共に作業を実施する形態の2つの形態で活動してきた。

前者には「旧モーガン邸を守る会」や「藤沢市まちづくり協会」(長久保公園、引地川親水公園)などがあった。後者にはアズビル社や日本精工社のような市有緑地でのCSR活動(社会貢献活動)を行う企業や旧モーガン邸でのボランティア活動を行う県立藤沢清流高校があった。

2. 経年の活動概況

① 2012～2014年 活動日数の増加

鵜沼松が岡5丁目公園愛護会支援事業を契機とする公園愛護会アドバイザー養成講座事業など単発的な事業とともに、緑地が比較的広い長久保公園や旧モーガン邸などで毎年継続して支援活動を実施してきた。



長久保公園での作業後の班長報告

アズビル社のCSR活動支援は西富第二緑地(藤沢霊苑隣)において、みどりい

っぱい市民の会の支援は稲荷の森において、県立藤沢清流高校生によるボランティア活動支援は旧モーガン邸において、それぞれ緑地の整備とともに家族などを含む全参加者への啓発活動も実施してきた。

この間の事業規模は、各年度とも作業日数が14日～17日、参加人数は240人～280人で、増加傾向にあった。

② 2015～2017年 支援先の増加

湘南藤沢文化ネットワークに対する支援事業を新たに開始し、国の登録有形文化財である有田家と旧稲元屋について、秋の一般公開に先立ち庭園等の整備作業を実施することにした。

日本精工社の稲荷の森におけるCSR活動への支援事業も開始した。同社の社員が家族ぐるみで多数参加できる活動とし、カントリーヘッジの整備作業などの支援を行うとともに、クラフト作りなどを通じた啓発活動を展開した。



日本精工社の家族のクラフト作り

この間の事業規模は、各年度とも作業日数が15日～17日、参加人数は243人～308人であり、増加傾向にあった。

③ 2018～2021年 コロナ禍のなか

これまでの支援事業は毎年増加傾向にあったが、2020年のコロナ禍により、作業日数が10日、参加人数は198人に激減した。また2021年は、8事業を継続して実施したものの、2事業は中止とした。それでも作業日数は14日、参加人数は246人であった。

これは、コロナ禍により緊急事態宣言及び蔓延防止等重点措置の発令により、その期間中の活動中止又は抑制が求められたためであった。

3. 支援先ごとの活動詳細

① 長久保公園(藤沢市まちづくり協会)

長久保公園は、協会と協定を結び活動してきた。敷地が広く、また季節ごとにイベントが複数回開催されていることから、毎年4回の整備作業を実施している。展望台周辺、菖蒲池及び中央花壇における手作業による除草等が作業の中心であり、女性会員も多数参加している。

② アズビル社・日本精工社の CSR 活動

アズビル社は、2011年から西富第二緑地において、2017年からは野鳥の観察ができる裏門公園を加え、毎年2カ所のCSR緑地保全活動を実施してきた。会の支援内容は、保全指導、ドングリ集め、クラフト作り、カブトムシのための落葉溜め作り、自然観察などであった。

2020年のコロナ禍により、同社では家族の参加ができなくなり、FGS活動の取材と自然観察を行ない、その内容を社内ネットセミナーで紹介する取り組みに変更した。支援内容に、ネットセミナーでの

講師や資料作りといった内容が加わるようになった。



アズビル社の間伐材の玉切り作業

日本精工社は、稲荷の森において、2017年から年2回のCSR活動を開始した。伐木や折れ枝などを使ったカントリーヘッジ作りなどのほか、野鳥の巣箱設置・自然観察などの活動を支援してきた。

残念ながら、コロナ禍のなか活動中止となることもあった。



日本精工社の野鳥の巣箱設置作業

③ 有田家及び旧稲元屋の庭園整備 (湘南藤沢文化ネットワーク)

湘南藤沢文化ネットワークは、毎年秋に「藤沢今昔・まちなかアートめぐり」を開催し、国の登録有形文化財である蔵などにアートを展示している。その開催に先立ち、

展示場所である有田家及び旧稲元屋の庭園の整備等を支援してきた。



旧稲元屋での竹林整備

④ 引地川親水公園 (藤沢市まちづくり協会)

春、秋の2回の緑地整備を実施してきた。ニッコウキスゲの仲間であるヘメロカリスが多数植栽されていて、春の作業は、その株の周囲を整備し、雑草に覆われないようにすることがメインである。

同公園は、桜見物、ジョギング・子ども連れの散歩などの利用者も多いことから、池の周辺において外来種植物の除去などの整備を実施してきている。

⑤ 旧モーガン邸 (旧モーガン邸を守る会と県立藤沢清流高校)

同邸内にはサワラ林、築山、竹林、畑跡地などがあり、多様な整備作業が必要とされ、年2回の支援活動を実施している。特に竹林については、有志によるボランティア作業を含め、その整備に力を入れてきた。



モーガン邸でのフェンスの修理

一方、同邸の比較的近くにある県立藤沢清流高校は、生徒の地域貢献ボランティア活動として、2015年から伐採木や枯れ枝の運び出し、畑地での草刈りなどを実施しており、鎌の使用方法や枝木の束ね方などの安全な活動のための技術指導を行ってきた。

また、同校の活動の前に台風による大木の幹折れ等があった際には、事前に臨時作業を実施して生徒たちの活動の危険除去も行ってきた。

⑥ 松が岡5丁目緑地 (同愛護会)

敷地が狭く、樹木が密集しているため、草刈り・枝払い・間伐などの支援を毎年1回実施してきている。カブトムシなどの昆虫のための落ち葉溜めの設置、マツの幼木の移植・育成、散策路の整備なども実施してきた。



松が岡5丁目緑地での散策路整備

⑦ 石川丸山谷戸

(丸山谷戸援農クラブ)

藤沢三大谷戸の一つである石川丸山谷戸では、丸山谷戸援農クラブが耕作放棄田の復田や周辺の水路、竹林等の整備を行っている。同クラブにはFGSの会員が多数参加していることから、加入案内や資金援助などの支援を継続してきた。

4. 今後の課題

NOK社は、2019年から具体的なCSR活動を検討していたが、コロナ禍のなかその詳細が決まらずにいた。2022年4月以降、大庭遊水地においてFGSの活動に参加する形式で支援を開始することとなった。

こうした企業や各種事業体の社会貢献活動への参加は、SDGsの流れに乗ってさらに増えるものと考えられる。こうした活動を支援していくことで、FGSの活動はより広がりをもてることになる。

FGSの活動フィールドは、市有緑地が中心になってきたが、実施主体の意向も踏まえつつ、一般民間緑地も選択肢に加えていく必要がある。

湘南藤沢文化ネットワークと有田家・旧稲元屋支援

湘南藤沢文化ネットワークは、藤沢の歴史的建造物・庭園・街並みを次世代に継承し、時代に合わせた利活用を推進している9つのボランティア団体の集合体である。

同ネットワークでは、毎秋に国の登録有形文化財である有田家住宅・土蔵や旧稲元屋呉服店の土蔵など藤沢宿をステージにした「藤沢今昔まちなかアート」を開催し、内外の芸術家を招き作品を展示している。

その開催にあたり、展示場となる庭園の整備が不可欠であり、同ネットワークの会員である「旧モーガン邸を守る会」の助言を受け、歴史的建造物・庭園への支援活動を開始することになった。

「藤沢今昔まちなかアート」の様子



有田家土蔵



旧稲元屋竹林前の広場

5. 活動実績

年度 年	作業回数 回	参加人数 人
2012	17	240
2013	16	268
2014	14	285
2015	16	243
2016	15	288
2017	17	308
2018	17	297
2019	17	310
2020	10	198
2021	14	246



第6章 民間緑地事業

1. 活動概要

NPOとして自立し、組織目的実現のために継続して活動していくためには、収益基盤の強化が不可欠との認識から民間事業への取り組みを進めてきた。

藤沢市には藤沢市企業等環境緑化推進協議会という会があり、藤沢市内に事業所を持つ57社の会社が加盟していた。事業所内の植栽等の保全作業についてFGS委託が予測されていたため、早い段階からFGSの収益事業の対象として検討した。

その後、複数の民間企業・組織と契約を結んだが、2021年の契約先は、東レ社、池上通信機社など3組織となった。いずれもNPO法人としての収益基盤を支える事業となっている。

2. 経年の活動概況

① 2010～2015年 収益事業開始

最初の民間緑地事業は2010年に活動を開始した東レ社緑地保全事業であった。東レ社との最初の接点はFGS会員の先輩知人の紹介による訪問がきっかけとなった。当初はボランティアへの作業依頼について、相当な危機感を持たれていたが、藤沢市から協働事業実績などの話を出していただき、関係者の熱意ある対応が決めとなって、受託につなげることができた。東レ社の緑地保全事業は、初めての請負契約による収益事業であった。

2011年に池上通信機社の委託による有償事業が加わり、2012年にはスポットでオイル工業内の緑地整備を実施した。

当時これらの収益事業は支援事業の中の請負事業と呼ばれることになった。

② 2016～2021年 独立事業化

2016年には支援事業の活動内容を見直し、支援協働事業・支援自主事業と請負事業の事業性格を明確にすること、請負事業の分離独立の準備期間とした。各種団体への協力、支援が増える傾向があり、協働事業外活動費を請負事業の収益から賄うことを基本とした全体経費の再構築を始めた。

2017年に請負事業を支援事業から分離して、担当理事が付いた独立した事業として運営することとした。

2019年に請負事業を民間緑地事業に名称変更した。

2020年に有償活動から離れ、ボランティアで民有地の竹林整備を開始した。

3. 事業毎の活動内容

① 東レ社(2010年～)

敷地内の急峻な谷戸地形もある同社緑地、竹林、椿林などの保全作業を12年間実施してきた。作業は1回につき4日間、参加者100人前後で年4回実施してきている。年間16日間で、参加者は400人前後の作業である。

2015年よりリーダーの負担を軽減するために、1人リーダー制から複数リーダー制(グループリーダー1人+チームリーダー4人)に変更した。

② 池上通信機社(2011年～)

池上通信機株式会社は藤沢メダカの飼育の分校として生物多様性に協力し

ている会社である。同社敷地内の「憩いの森」、正門脇の「メダカの池」周辺の保全整備や社員駐車場の草刈り、建物と塀の間の樹木の枝落としなどを年に春・秋の2回実施してきた。1回の参加者は18人前後である。

③ 東レ社プランター植栽保守管理 (2013～2017年)

敷地内21カ所のプランターの植栽保守管理を年に春・秋の2回、5年間実施した。初日に花苗移植の土作り作業、それから2週間程度後に花苗をプランターへ移植する作業であった。

さらに2015年より移植後4～5ヶ月間に5回プランター内の雑草取りや水やりなどのプランターパトロールを実施した。参加人数は花苗移植では1回に20人前後、パトロールは1回に5人前後だった。プランターの植栽保守管理を丁寧に行い天候の変化や寒さから花苗を守り、美観保持に努めた。残念ながら予算の見直しにより、2017年に終了した。

④ 養護老人ホーム湘風園緑地 (2014年～)

市民活動団体である「みどりいっぱい市民の会」のメンバーの一人からの依頼を受け活動を開始した。下草刈り、花木の剪定、アジサイの刈込み、伐木、竹林整備などを春・秋の年2回実施する。参加人数は2018年までは1回20人前後だった。それ以降は抑え気味に1回12人前後とした。

⑤ 藤沢エデンの園一番館プランター 植栽保守管理事業 (2017～2019年)

大勢の人の目に入る正面玄関入口と通用口に設置された6基のプランターの苗保守管理を毎月2回実施した。作業の折には当園に出入りする方々から沢山の感謝の言葉を頂いたが、3年間で終了となった。3年間の実績は作業日数72日間、217名の参加人数であった。

⑤ 民有地(竹林)整備(ボランティア)

2020年よりボランティアで民有地の竹林整備を開始した。施主の要請に応え、倒竹の整理、除伐、玉切り、運搬を行い、明るく景観のよい竹林作りに貢献している。2021年は作業日数14日、165名の参加人数であった。

4. 今後の課題

東レ社、池上通信機社、湘風園から高い信頼を得ている。これは FGS にとって大きな財産であり、今後とも民間緑地事業を大切に増やしていくことが望まれる。

SDGsに取り組む企業や学校、管理されていない民間緑地所有者などに、どのように働きかけていくかが課題である。



① 東レ社構内ケヤキ診断

2014年に東レ社より台風で傷ついた構内のシンボリックなケヤキの大木の診断を依頼され、樹木医の資格を持っているFGS会員が調査をして診断書を提出した。それをもとに東レは(株)湘南グリーンサービスへ修復工事を発注し、無事に修復工事は完了した。その結果、現在でもその雄姿をとどめることができる。



ケヤキの大木診断中



修復を終えたケヤキ

② 東レ社緑地植生調査

(1) 2017年6月～7月 コドラート調査

2017年に緑地保全活動の本格化に伴い植生調査の実施を検討した。緑地保全作業によって植生がどのように変化したかを追跡調査するために、作業領域内の植生環境の異なる5カ所にコドラートを設置し、生育種名や植被率等を記録することにした。2年間で6回実施し、調査結果報告書を東レ社に提出した。

(2) 2018年8月～ 2つのエリアに注目

これまでのコドラート調査を主体とする調査結果を検討し、初期の目的を達成したことが確認できたので、新たなフェーズの植生調査に進むことにした。

新たなフェーズでは、調査対象区域は重要種を含む生育種が豊富で、頻繁に整備作業が入る手広谷戸周辺と川名遊歩道周辺に注力し、植生調査とともに作業前の植生保護に取り組むことにした。コドラート調査は3カ所に縮小、以上により調査日数は従前の1回2日から1日に減らすことにした。



コドラート調査

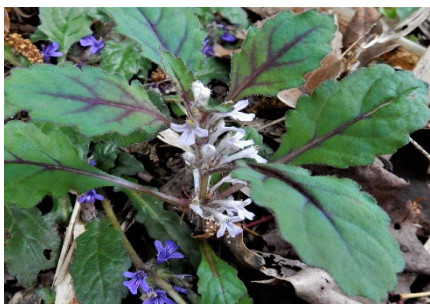
(3) 2019年7月～ 保全による植生の変化

「東レ緑地に咲く草花データベース」の作成を始め、調査のたびにデータ化した。その数は、2021年末時点で265種に達した。

植生調査から見た東レ緑地の現況は次のとおりである。

手広谷戸は谷戸奥の尾根上から侵出したマダケに覆われていたが、毎年のマダケ伐採により谷戸底に従前の植物である、ツクバキンモウソウ、ムラサキニガナ、イヌガラシなどが復活してきた。谷戸西の尾根上にはカンアオイの群生が顕著である。

川名遊歩道周辺はアズマネザサに一面覆われていたが、再三の刈払いで、多種の野草が復活した。特にヤマユリとアキノタムラソウの増殖が顕著で、そのほかノダケ、タムラソウ、オカタノオ、エビネ、カントウカンアオイなどの多種が増殖してきている。



撮影日 2019年4月24日

撮影場所 手広谷戸

名称 ツクバキンモウソウ

学名 Ajuga yesoensis

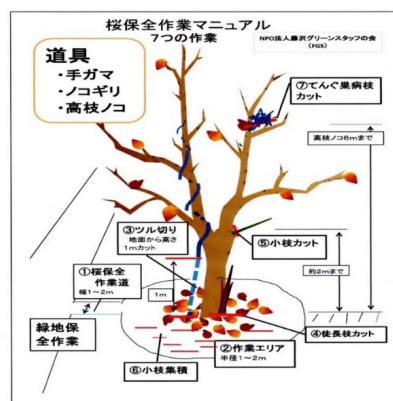
分類 シソ科キランソウ属

特記 重①

③ 東レ社桜保全プロジェクト

東レ社緑地保全事業は2010年に活動開始以来順調に進んできた。2021年には、新たな取り組みとして、継続的に実施でき、東レ社にも周辺住民の方にも喜んでもらえる活動として「桜保全プロジェクト」を提案し、了解を得ることができた。

このプロジェクトは、敷地内の保全可能なすべての桜を調査し、「桜マップ」を作成しつつ、「保全マニュアル」に沿った活動を行うものであった。2021年10月より開始し、88本の保全を完了したが、その数はさらに多く、次年度以降にも継続することになった(2022年の桜マップには181本の桜が表示されている)。



桜保全作業マニュアル



保全完了後、番号札取り付け

5. 民間事業における会運営費用等への充当額

年度 年	収入 円	作業実費 円	会運営費用等充当額 *7 円	備考
2012	2,387,600	1,221,000	1,166,600	*1
2013	2,361,420	1,468,108	893,312	*2
2014	2,671,272	1,701,816	969,456	*3
2015	2,864,900	2,161,804	703,096	*3
2016	2,898,504	2,116,808	781,696	*3
2017	2,942,984	2,221,916	721,068	*4
2018	2,561,636	2,006,850	554,786	*5
2019	2,529,112	1,883,164	645,948	*5
2020	2,452,380	1,677,162	775,218	*6
2021	2,345,000	1,636,089	708,911	*6

6. 活動実績

年度 年	作業 日数 日	参加 人数 人	備考
2012	14	313	*1
2013	20	405	*2
2014	28	502	*3
2015	32	591	*3
2016	33	600	*3
2017	56	704	*4
2018	42	573	*5
2019	44	572	*5
2020	27	562	*6
2021	33	641	*6

備考

- *1 東レ社緑地、池上通信機社緑地
- *2 東レ社緑地、池上通信機社緑地、東レ社プランター植栽
- *3 東レ社緑地、池上通信機社緑地、東レ社プランター植栽、湘風園緑地
- *4 東レ社緑地、池上通信機社緑地、東レ社プランター植栽、湘風園緑地、藤沢エデンの園プランター植栽
- *5 東レ社緑地、池上通信機社緑地、湘風園緑地、藤沢エデンの園プランター植栽
- *6 東レ社緑地、池上通信機社緑地、湘風園緑地、民有地(竹林)整備(ボランティア)
- *7 事務局運営費、自主事業活動費、資機材費等

第7章 事務局運営事業・事務局事業

1. 活動概要

事務局は、2012年の定款改訂により、事務局長を専任体制としたところからリスタートした。その後は、複数の活動を吸収しつつ、会員の意見に耳を傾け、多様な活動を行ってきた。また、IT化など多くの新たな取り組みにも挑戦してきた。2021年の担当業務は、大きく事務局運営事業と事務局活動に分けられるようになった。

事務局運営事業は、①ステップアップ講座、②西俣野研修グループ、③機材整備・管理の3つの柱となった。

事務局活動は、①基盤整備(マニュアル類・ネットワーク形成)、②会員の知見・スキルの向上、③会員の親睦・他のNPOとの懇親、④課題解決(規則案の作成)、⑤経理・総務・広報の5つの柱となった。

毎月開催する事務局会議において様々なテーマについて論議を重ね、重要案件は理事会への付議を行ってきた。情報活動の柱である FGS 通信は年4～6回の作成を行い、82号まで発行してきた。ホームページの作成・改訂を行った。会員の増加と活動数の増加により、2022年の年間活動登録については、150名の会員毎に約110活動への登録手続きを行うことになった。会計処理件数も事業の拡大により800件を上回る件数となった(2012年度申請書類はわずか150枚)。

2. 経年の活動概況

① 2012～2014年 事務局体制整備

2012年に、代表電話・事務局電話を設置し、ホームページを開設するなど体制を確立し、10年史を編纂し発刊した。2013年にはNPO会計システムに移行し、会計入力業務の外注化、ネットバンキングへの移行など効率化と体制の一層の強化を図った。同年、藤沢市主催の「フォローアップ事業」と養成講座事業主催の「ステップアップサロン」を引継ぎ、環境教育研修を含めたステップアップ講座を開設した。

はじめて、生涯学習大学より体験ボランティア2名を受け入れた。神奈川県「緑と花いっぱい」功労者表彰を受賞(10月)した。



受賞後の記念写真(旧モーガン邸にて)

主な活動は次のとおりであった。

- ・ステップアップ講座において、「チェンソー取扱講座」「刈払機取扱講座」に「労働安全衛生特別教育」及び技能・筆記テストをルール化した。
- ・西俣野活動(当時支援事業)
- ・懇親イベント「境川沿いの史跡巡り」



2012年12月20日 長後史跡巡りの参加者たち

- ・懇親イベント「日本民家園を訪ねる」

- ・同「大山街道から引地川源流を訪ねる」



2012年11月10日 引地川源流「泉の森」を訪ねる

- ・同「真鶴の森(保全林)」



2014年11月15日 真鶴半島の豊かな自然と歴史に触れる

- ・同「御所見の歴史と樹木をめぐる」
- ・環境教育「小田原 山盛の会」交流



2014年5月26日 白銀山ブナの森回帰活動を視察

- ・同「茅ヶ崎里山公園」

② 2015～2017年 念願の事務所開設

2016年、旧有田邸内に大鋸事務所を開設した。週3日午後に事務局員が交代で詰め、来訪者への対応を行なった。初年度の利用者は390名であった。有志により、旧有田邸庭園整備も行い、良好な環境を維持した。

主な活動は次のとおりであった。

- ・西俣野活動(当時支援事業)
- ・懇親イベント「かなざわ森沢山の会」交流



2015年10月3日 1本梯子の利用・チルホール操作を体験

- ・同「真鶴採石場ツアー」
- ・懇親イベント「新治市民の森愛護会」交流



2016年12月3日 横浜市・新治市民の森愛護会を訪ねる

- ・環境教育「海浜植物観察」
- ・同「小網代の森」

③ 2018～2021年 “やりがい”PJ

2018年より、西俣野活動及び備品管理・機材整備活動の2活動と同好会活動である樹木勉強会を事務局運営事業に変更した。ステップアップ講座に、高所作業安全講習(2018～)と竹林整備講習(2020～)を追加した。

2021年には、動力機械整備・使用の自宅学習用の動画を作成しYouTubeとホームページにアップした。樹木勉強会が主催する「里山保全と整備の基礎」講座を実施した。FGS 紹介パンフレットを改

訂し、新ホームページに移行した。会議のWEB化を推進した。

2018年にスタートした「“やりがい“プロジェクト」では、課題を整理し、新たな会の姿を考え、目指すことになった。その柱は次の6本であった。

- ① 養成講座運営方法見直し
- ② 活動費支払基準見直し・キャッシュレス化
- ③ 情報発信力強化(ホームページ改修)
- ④ リーダーの負担軽減
- ⑤ 子ども向け里山・自然体験の場創出
- ⑥ 市民向けシンポジウム開催

2020年からはコロナ対策のため、活動の縮小や諸企画の延期・中止を余儀なくされた。特に懇親のための活動はほとんど断念した。

2021年には、翌年の4月に新「みろくじ事務所」に移転することを決定し、新たな10年に向けての道筋を作ることができた。同年9月には第32回「みどりの愛護」功労者国土交通大臣表彰を受けた。



20年の歩みとともに、「学習の場であり、会員相互の交流と研鑽の場」でもある西

俣野緑地では、日本大学ボランティア体験学習を受け入れるなど、さらに活動の幅を広げたが、2023年度から活動内容全般を見直すこととした。

西俣野緑地「奇跡のアベマキ」

2019年10月12日19時 台風19号は伊豆半島に上陸し、箱根に総雨量1,000ミリの雨を降らせ、関東地方を駆け抜けた。

10月27日(日曜日)西俣野緑地に、活動に入って見たものは、広場に盤根を見せて横たわっていた「アベマキ」だった。何の躊躇もなく、「処理されるだろう」と思いつつ、同じく多くの被害を受けて、滅茶滅茶になった竹林の整備を終えて、休憩に戻って驚いた。

何と、倒れていたはずの「アベマキ」が頭は無いが、すっと立ちあがっていた。

作業に携わった方に、勇んで「どうして?」と聞いてみた。「先端から切っていたら、中央迄来たところで、徐々に動き始め、自分で立ち上がった」と。根っこ部分も綺麗にもとに戻って、区別が出来ない。「スゲー!!!!」「こんなこともあるんだ」

以降、「奇跡のアベマキ」と呼んでいる。



台風で完全に倒れたアベマキ



立ち直った!



現在も元気♪

コロナ対策のため、この間の取り組みは次の通りに留まった。

- ・懇親イベント「俣野別邸から西俣野周辺をめぐる歴史散歩」
- ・環境教育「遊水地環境視察」



2018年3月17日 大庭遊水地にて野鳥観察会

- ・同「境川遊水地公園」



2018年5月24日 境川遊水地情報センター前にて

- ・同「鎌倉中央公園」



2018年11月10日 かねては山崎谷戸、里山の風情を残す

3. 今後の課題

① 会員数の維持

会員の高齢化が毎年進むなか、退会者も避けられない。新規入会者を増やすべく広報活動の強化が望まれる。

② リーダー層の育成

諸活動におけるリーダーや理事など活動の中軸を担える人材育成プログラムを策定、実施する。

③ 動力機械使用資格の見直し

操作技能の普及と安全な使用、整備技能の継承といった観点から、資格更新制度や資格定年制を検討する必要がある。

④ 一般管理費比率の上昇傾向への対応

収入増とともに管理費支出についての創意工夫が望まれる。

⑤ 事務局活動への参加者増

会計・総務・ITなどの基盤活動への参加者が固定化されつつあり、新たな参加者を増やすことが望まれる。

「“やりがい”プロジェクト」の発足と成果

理事長の発案により、理事長と2期目の理事1名、新任理事3名の5名がメンバーとなり、2018年7月12日に第1回会議で発足し、2019年8月14日の解散まで11回の論議と懇親会を行った。

理事長の趣旨説明に始まり、「会員は様々な動機で入会し活動しているが“やりがい”を感じられる活動となっているのか」、「ボランティア活動で、活動費はどうあるべきか」、「会員の高齢化・FGSを取り巻く社会情勢の変化への対応はこのままで良いのか」といった問いかけを行い、現状とこれからの方向について、それぞれの考え方を論議し合った。

「まず会の現状を把握しなければならない。FGS発足の趣旨、定款の理念・夢・活動経緯などを学び直しメンバーで共有する必

要がある。そのため『FGSの10年史』を熟読したうえで、書類など記録がないものは先輩諸氏に、現状は担当理事にヒヤリングしよう」ということから論議を始めた。

具体的には、「請負事業（現在の民間事業）参入を決めた総会時の議論とは」、「東レ、湘風園、池上通信機、エデンの園の作業を請け負った経緯、費用算定は」、「西俣野緑地は協定・覚書もなく活動できるのは何故か」、「養成講座の主旨・カリキュラムなど開催手法はこのままで良いのか」、「環境調査の役割、調査結果を緑地保全活動にどう生かすのか」など、全てについて認識を共有していった。

論議は会議室に留まることなく、会議後の懇親会においても常に白熱したものであった。

論議は、「入会した会員各々の“やりがい”は様々であり、会で決めつけることではない」という点で一致し、「やりがいプロジェクト」を「やる、やるプロジェクト」に進化させ、今後の方向（案）を提案することにした。

2019年4月の総会で中間報告、その後会員へのアンケートを行い、最終的に2019年9月7日、労働会館の報告会で「プロジェクトとしての総まとめ」を提案し、課題解決「タスクチーム」を立ち上げることに繋げた。

2020年には、コロナ禍の影響で養成講座を除き会の活動がほぼ中止されるなど非常事態になるなか、以下の成果を生み出すことができた。

- ・日本大学生物資源科学部の先生・学生との交流及び連携したイベント



2019年5月9日日大の講義・演習林見学会

- ・活動費のキャッシュレス化（民間事業等）
- ・藤沢市との共催で、友好団体・企業の協賛・後援による、生物多様性をテーマとする、慶応義塾大学・岸由二名誉教授を講師に招いた市民参加のシンポジウム開催



2020年2月23日「生物多様性シンポジウム」

- ・従来の養成講座の名称から“リーダー”を外し「里山保全ボランティア養成講座」に変更
- ・養成講座の運営について前年度修了生が次年度の講座運営を担う「システム化」
- ・ホームページの改訂
- ・民有地（花応院、西俣野、大庭持瀬、石川丸山）の竹林ボランティア活動



2019年5月12日 民有地竹林整備ボランティア

- ・生物多様性など環境保全を重点とする
保全事業として「川名清水緑地」を新規3
ヵ年協働事業に追加

4. 活動実績

① 事務局運営事業・事務局会議

年度 年	事務局運営事業		事務局会議	
	回数 回	参加者数 人	回数 回	参加者数 人
2012	17	275	11	142
2013	10	118	12	175
2014	12	195	12	171
2015	14	236	12	130
2016	10	125	9	118
2017	10	147	10	130
2018	9	146	10	130
2019	10	156	11	95
2020	4	45	9	103
2021	10	107	10	111

注：事務局運営事業は総会を除く、ステップアップ講習会など。2020年はコロナ対策で活動半減。

② 西俣野活動・樹木勉強会

年度 年	西俣野活動		樹木勉強会	
	回数 回	参加者数 人	回数 回	参加者数 人
2012	19	201	14	89
2013	19	216	10	66
2014	19	224	9	58
2015	21	292	11	110
2016	23	322	11	153
2017	19	241	10	135
2018	13	292	12	123
2019	19	202	11	71
2020	8	83	6	70
2021	18	207	7	124

注：樹木勉強会の市民参加数は除く。2020年はコロナ対策で活動半減。



第8章 20年の総括と今後の課題

1. 20年の総括

① 事業

(1) 協働事業

全事業において、市との連携を軸に着実な取り組みを進めてきた。対象緑地は増え、各緑地は良好な状態となってきた。養成講座の受講者数は増加に転じる期待が持てるようになった。環境調査はデータベースの充実を図りつつあり、普及啓発活動の領域は確実に拡大してきた。支援活動先は着実に増え、その支援内容は事業間の協力により多様なニーズに応えられるようになってきた。

各事業とも、生物多様性を意識した活動にバージョンアップし、みどりや鳥、昆虫、水生生物との関係を重視する取り組みを織り込んできた。各緑地では希少植物を明確にして保護活動を行ってきた。谷戸全体を俯瞰し、里山を復元することで希少生物を保護しようとする取り組みも始めている。

(2) 自主事業

民間緑地における保全活動は定着し、竹林整備など諸団体と連携した活動まで行うようになった。各自主活動において発注者からの大きな信頼を得ることができている。協働事業を通じて得た経験を民間緑地の活動に活かすことができている。

② 組織

(1) NPO としての自立

自主事業(民間事業)から得る収益ならびに支援先などからの寄付金により、管

理費をカバーすることができ、コロナの影響を除けば概ね良好な決算を行ってきた。

(2) 会員

会員数は150名規模に成長し、組織体制も確立することができた。会員の知見やスキルを高めるための諸活動を充実させ、会員相互の情報共有のための取り組みも強化してきた。

2. 今後の課題

① 事業

(1) 協働事業

緑地保全活動においては、市民・市民団体との連携強化、指定緑地毎の特性と将来像を描いたうえでの作業計画の策定と提案、さらには年間を通じ良好な状態を維持する活動の3点が望まれる。こうした活動を支える体制として、運搬作業の軽減を図りつつ頻繁な活動が行えるように、特定の緑地において機材倉庫あるいは保管用コンテナを設置していくことが望まれる。また、女性・高齢者の安全安心を確保するために、電動式機器の増加を進めていきたい。

養成講座事業では、総会員数を維持するために毎年20名以上の受講者を確保していくことが最大の課題である。受講者の多様化をふまえたカリキュラムの工夫も行いたい。また、入会後のスキルアップのための講座を設けていきたい。

環境調査事業は、データベースを緑地保全や普及啓発に活かしていくこと、希少植物保護対策をさらに工夫していくこと、緑地マップ作成・植物銘板設置など

市民が楽しめる環境を作っていくことが望まれる。また、ビオトープ管理は見直しを行なう段階になっている。水質・水生生物調査は継続することがなにより重要である。

普及啓発事業では、現在の活動に加え新たな自主活動を増やすこと、外部発信力を強化すること、イベントの工夫や新たなクラフトの開発をしていくことが必要である。

(2) 自主事業

支援事業・民間事業では、一般企業や団体、学校などを増やしていくことが重要である。また、管理されていない民間緑地についての具体的なアプローチが望まれる。

(1) NPO としての自立

管理費割合の上昇傾向をふまえ、収入を増やすとともに、管理費支出の創意工夫を図ることが望まれる。

(2) 会員

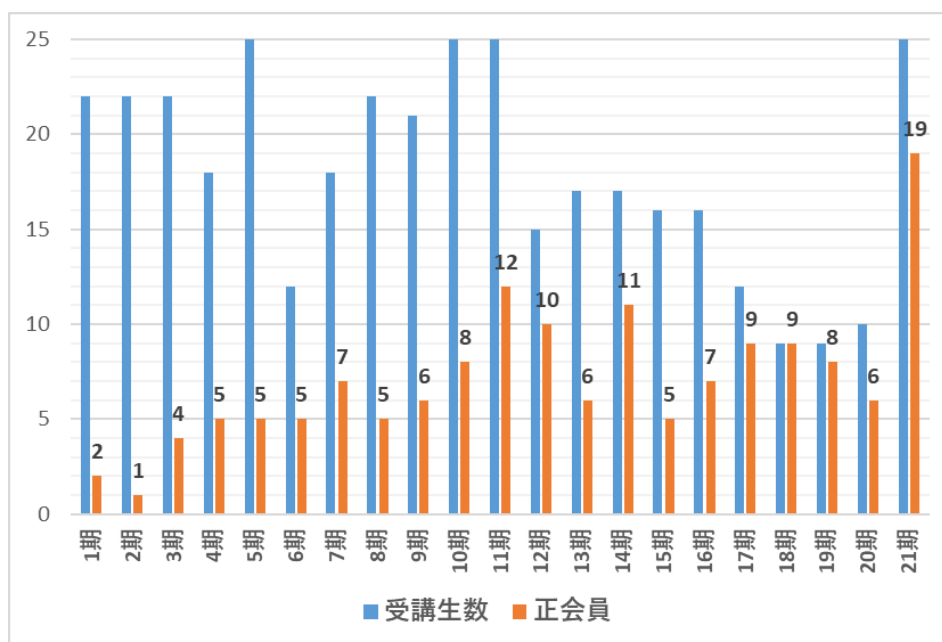
各事業の課題を実現していくためにも会員数の維持が最大の課題である。そのためには養成講座受講者数が安定的に20名を超えるように、募集の広報活動を強化していく必要がある。また、準会員制度の活用も検討していきたい。

リーダー・事務局活動者等を養成する講座や仕組みが必要とされ、育成プログラムを開設することが望まれる。

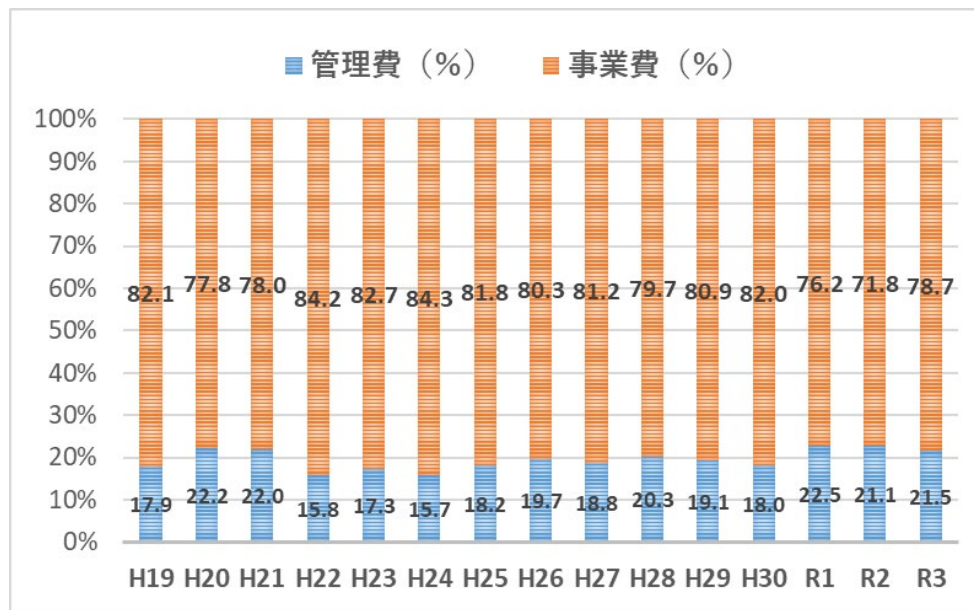
会員の高齢化をふまえ、安全安心のために動力機械使用資格制度の見直しや資格定年制度の検討が必要である。

② 組織

資料1. 養成講座受講者数の推移と現在の正会員数



資料2. 事業費と管理費の割合



参考資料

1. 協働事業・保全事業緑地及び運営体制一覧(2021年)

地区区分・名	緑地名	全体面積 (㎡)	リーダー名
北 部 地 区	亀井野緑地	1,978	田原 敦(10期)
リーダー:宮崎正二(5期)	唐池緑地	2,995	亀龍恒一(12期)
	善行二丁目緑地	1,588	西田啓二(18期)
	大庭持瀬緑地	18,583	堀江 厚(17期)
	稻荷持瀬緑地	3,100	高橋正秋(14期)
	石川鍛冶山緑地	2,119	眞田誠司(14期) 梶山文夫(8期)
東 部 地 区	西富憩いの森	8,353	小笠原多加子(15期)
リーダー:手塚 功(13期)	本町一丁目緑地	2,850	角田政史(10期)
	渡内緑地	2,731	斧原昭良(19期)
	田村の杜	203	樋口一志(15期)
	天嶽院緑地	3,352	菊地恒志(12期)
西 部 地 区	稻荷の森	14,864	梶山文夫(8期)
リーダー:菊池潤一(9期)	大庭小ヶ谷	7,038	高橋 章(14期)
	裏門公園	26,796	津田陽一(18期)
	大庭遊水地	8,000	加藤和彦(11期)
	稻荷憩いの森	4,090	西澤雅三(10期)
	小糸台公園ビオトープ	15,668	
南 部 地 区	片瀬山五丁目緑地 (石切り場跡)	15,678	阿部純一(4期)
リーダー:端山菊雄(12期)	片瀬山一丁目緑地	7,241	伊奈敏治(17期)
	片瀬山五丁目緑地 (岩屋不動寄り)	4,296	田中一正(16期)
	宮前緑地	6,518	関根俊夫(12期)
	片瀬山憩いの森	2,133	野崎 滋(17期)
川名清水緑地	川名清水緑地	66,240	松本敏夫(14期)
全体	23カ所	226,414	

2. 協働事業・保全事業緑地の地図（2021年）



3. 各種事業・保全活動緑地の地図（2021年）



4. 事務所



新事務所(2022年4月～):「まちづくりハウスみろくじ」



旧大鋸事務所(2016～2022年):「有田邸」(写真左民家)

付編

1. FGS 概要(2022年7月1日現在)

事務所 〒251-0016
藤沢市弥勒寺1-22-21
みろくじハウス内
連絡先 fgs@live.jp
HP <https://www.f-green-s.com/>
設立 2002年4月
藤沢グリーンスタッフの会
2007年4月3日
特定非営利活動法人
藤沢グリーンスタッフの会
正会員数 148名(2022年4月)

主要事業

藤沢市協働事業
指定緑地保全、里山保全ボランティア講座、環境調査、普及啓発、支援
自主事業
民間緑地保全、普及啓発、支援

理事

理事長	東 昭一(2016～)
副理事長	秋山 繁
理事	荒井 俊行
理事	小笠原 多加子
理事	村越 章裕
理事	野崎 滋
理事	三浦 健
理事	会田 暁生
理事	角田 政史
監事	西澤 雅三
監事	加藤 和彦

事務局長 斧原 昭良
事務局長補佐 福田 廣

2. 歴代役員名簿

(現役員除く・就任年代順)

① 代表(NPO 化以前)

篠木 明 (2003～2004年)
甘粕 喜一郎 (2005～2007年)

② 理事長(NPO 化以降)

國分 俊明 (2007～2010年)
河村 卓郎 (2010～2012年)
笹脇 弘 (2012～2014年)
樋口 弘之 (2014～2016年)

③ 理事・監事(同上)

桃崎 徳	山本 弘
櫟原 直樹	石井 侃三
田川 勝雄	田村 陽子
小山 壽尉	高岡 昌平
阿部 純一	篠木 明
板倉 慶隆	中村 善彦
清水 勲	木下 武夫
植田 稔	春山 賢三
福住 敏美	吉田 義隆
上田 勇	福島 弘一郎
太田 喜久男	加賀美 修一
光井 孝明	徳永 辰一郎
赤堀 正	菊池 潤一
端山 菊雄	田中 幸英
世古 秀幸	戸井田 道子
三好 尚武	迎 俊郎
青木 伸廣	遠山 興三
高橋 正秋	真覚 邦彦
松本 敏夫	岩崎 利夫
小松 立史	菊地 恒志
森 則雄	

3. 年表

年度	月	運営	月	イベント・特記事項	世相
2001 (H13)	5	第1回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。22名。			9. 11米で同時多発テロ。
2002 (H14)	4 4	第2回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。22名。 藤沢グリーン・スタッフの会立ち上げ。			FIFA ワールドカップ日韓共同開催日本初のベスト16。
2003 (H15)	4 4	第3回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。22名。1・2期生が合流し、会則など整備。代表篠木明。38名。会費1,000円。			自衛隊がイラクへ派遣。米英軍がフセイン元大統領拘束。
2004 (H16)	4 4	第4回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 第1回全体会議(川名市民の家) FGS 会則が承認される。自主活動は川名緑地・西俣野緑地。	2 2	みんなの森づくり活動助成植樹祭(西俣野緑地)。 みどりいっぱい市民の会との交流会。	新潟県中越地震、震度7。アテネ五輪で金メダル16個。総数史上最多。
2005 (H17)	4 4 5	第5回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 新代表就任: 甘粕喜一郎。 特定非営利活動法人設立準備委員会発足(設立準備始まる)。54名。	4 10	丸山谷戸援農クラブ設立。 「ヤマトセンブリ」川名緑地で発見。	JR福知山線で脱線事故。死亡107人。
2006 (H18)	4 4 12	第6回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。自主運営となる。 「里山通信」創刊号。 臨時総会(NPO 法人設立総会(市役所新館7階)「特定非営利活動法人藤沢グリーンスタッフの会」定款承認。79名	5 7 2 2	長久保公園・春の緑と花まつり参加。 教育文化センター支援事業(大庭遊水地)。 長久保公園支援(ツツジ園)。 公園みどり課主催のフォローアップ研修。	冥王星太陽系惑星から降下。 荒川静香トリノ五輪で金メダル。
2007 (H19)	4 4 6 10	第7回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 藤沢グリーンスタッフの会総会(市役所新館7階)。94名。 モデル協働事業(10か所)。 新理事長: 国分俊明。 事業推進会議。	4 7 6 11	協働事業(1回目)スタート。 教育文化センター支援事業(大庭遊水地)。 FGS通信創刊。 NPO見本市(深沢高校)	年金記録未統合5000万件判明。 角界の不祥事が相次ぎ揺れる。
2008 (H20)	4 4	第8回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 藤沢グリーンスタッフの会総会(市役所職員会館3階)。90名。	10 2	アースデイ募金の贈呈式(ロハスインターナショナル代表)。 みどりいっぱい市民の会支援事業(稲荷の森)。	日本人4人にノーベル賞。 金融危機が世界に波及し株価暴落。
2009 (H21)	4 4	第9回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 藤沢グリーンスタッフの会総会(市役所職員会館3階)。105名。 会費2,000円に改定。	5 4 5	小糸台公園ビオトープ管理事業開始。 長久保公園倉庫改装、事務所利用。 長久保公園支援事業(まち協との協働事業開始)ホームページ立ち上げ。	裁判員制度スタート。 日本でも新型インフルエンザ流行。

年度	月	運営	月	イベント・特記事項	世相
2010 (H22)	4 4	第10回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (市役所職員会館3階)。94名。	4 1 5	協働事業(2回目・20カ所)スタート。 体育センター支援事業(体育センター)。テング 巣病処理支援事業。 東レ社と民間事業。 山武(当時)支援事業。	尖閣漁船事件ビデオ流出。宮崎で「口蹄疫」発生。 チリ落盤事故 33人救出。
2011 (H23)	4 4	第11回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。24名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (市役所職員会館3階)。112名。	5 7 7 9 10	池上通信機支援事業。 菖蒲沢支援事業。 唐池緑地で住民アンケート実施。 旧モーガン邸支援事業。 ホームページ、リニューアル開設。	3. 11東日本大震災(M・9.0)。福島原発事故。
2012 (H24)	4 4	第12回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。15名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢産業センター6階)。133名 新理事長:笹脇弘	3 10	駒寄団地植栽樹木の処理作業。 アイランドフェスタ参加。	中国トップに習近平氏。 東京スカイツリー開業。
2013 (H25)	4 4	第13回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。15名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢産業センター)。115名。	1 2	10年史を編纂発行。 フォローアップ研修(終了)。	アベノミクス始動。 アルジェリア人質事件。
2014 (H26)	4 4	第14回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。17名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市労働会館)。117名。 新理事長:樋口弘之。	4 5 8	協働事業(3回目・20カ所)スタート。 湘風園での活動開始。 緑地定期パトロール開始。	消費税8%。 御岳山噴火。 ノーベル賞に赤崎・天野・中村の3氏。
2015 (H27)	4 4	第15回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。16名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市労働会館)。131名	12 6	「カントリーヘッジ」「落葉溜め」の活動開始。 太陽の家まつりに参加。	TPP大筋合意。 国連「SDGs」採択。
2016 (H28)	4 4 4	第16回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。14名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。120名。 新理事長:東昭一	5 4	外来種の抜き取り、鳥の巣箱設置開始。 大鋸事務所開設。	北海道新幹線開業。 米大統領にトランプ氏就任。
2017 (H29)	4	第17回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。12名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。116名。	4 10 11 11	協働事業(4回目・22カ所)スタート。 学生ボランティア受入。 NSK 支援事業開始。 第一回「ふじさわ子ども森の探偵団」開催。	衆議院解散・総選挙。 桐生祥秀100mで9.98秒。
2018 (H30)	4 4	第18回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。10名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。135名。	4 4	安全活動委員会設置。 やりがいプロジェクトスタート。	大谷翔平 MLで最優秀新人賞。 藤沢市「生物多様性戦略」。

年度	月	運営	月	イベント・特記事項	世相
2019 (H31・R1)	4 4	第19回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。9名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。124名。	4	環境調査結果のデータベース化。	新元号令和に決定。 消費税10% ラグビーW杯開催。
2020 (R2)	4 4	第20回里山保全ボランティアリーダー養成講座開講。8名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (大鋸事務所)。110名。	4	協働事業(5回目・23カ所)スタート。 民有地竹林整備活動開始。 緊急事態宣言により活動半減。	新型コロナ感染症世界的流行と緊急事態宣言。 米大統領にバイデン氏就任。
2021 (R3)	4 4	第21回里山保全ボランティア養成講座開講。25名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。121名。	4	川名清水谷戸プロジェクトチームを編成。	コロナ緊急事態宣言。 東京オリンピック・パラリンピック開催。
2022 (R4)	4 4	第21回里山保全ボランティア養成講座開講。24名。 藤沢グリーンスタッフの会総会 (藤沢市民会館)。125名。	4	新事務所に移転	国連生物多様性条約第15回締約国会議開催(COP15)



5. 資料提供・協力

藤沢市都市整備部みどり保全課

藤沢グリーンスタッフの会関連市関係者

長久保公園都市緑化植物園

東レ株式会社基礎研究センター

アズビル株式会社環境推進部環境価値創造グループ



挿絵について

記念誌編集メンバーである澤貴美子さんの養成講座におけるマイ生物図鑑から借用させて頂きました。手描きのドングリや落葉など、見事な出来栄です。読者の皆様が暫しホッと頂けると有難いです。

編集後記 “つなぎ・つながりを大切に”

FGSが20周年を迎える2022年4月に向けて、1年前から準備に入りました。

毎月1回の打合せを重ねて、メンバー全員が「10年史」や議案・議事録・日報を精査しつつ、取材をし、編纂作業と審議を行い、2023年1月にこの原稿が完成しました。大変な作業でした。

編纂作業で思ったことは、記録を残すことはやはり大切だということ。新しい会員に過去の経緯や試行錯誤とその結果を正確に残し、理念のみならず具体的な活動をまとめておく必要があります。対外的にもFGSの活動を長期的な視点で理解してもらい、具体的な活動を正しく伝えていくことが大切です。そして過去と未来をつなぎながら、内外の課題を明確にする。この編纂作業がこうした目的に沿うものになっていれば幸いです。

FGS活動の主軸は藤沢市との協働事業であることにも改めて気づきました。今後とも市には支援をいただきつつ、当方からの提言も行い、より良い藤沢・湘南の緑の形成・維持に全力を傾けていきたいと思いました。今後も市とみどりのつなぎ役にならねばなりません。

また、FGS活動自体が進化し続けていることに気づくことができました。NPO法人として社会的使命を明確にし、活動範囲を徐々に拡大してきています。市との協定に基づく緑地のみならず民間・市民の緑地にも広がってきています。活動内容も生物多様性・環境調査を反映した緑地保全に進化し、普及啓発事業は作品に様々な工夫を行い、支援活動と一体になってきているものもあります。民間緑地事業も、受託にふさわしいか否かを吟味しつつ、その内容を充実させてきています。養成講座は創意工夫により適宜プログラムを変更し、コロナ環境をも乗り越えてきました。今後も多方面とのつなぎ役を担っていきたいと考えています。

様々な活動は全て「人と人」のつながりのなかで、多様性を活かしながら進められてきたように思います。残念ながらここ数年はコロナ禍のなかで「人と人」をつなぐ活動が不十分にならざるを得ませんでした。事務局が担当してきた会員同士の懇親活動や他の緑地保全団体や市民等との対外活動が再びフルに展開できることを祈るばかりです。

FGS会員は毎年確実に高齢化し、この10年でも複数の先達を失ってきました。ご冥福をお祈りしつつ、先達の想いを大切にして今後の活動につないでいきたいと思います。

末筆になりましたが、表現が適切でなかったり、記録に残せなかったりしたことも多数あるかと思いますが。何卒ご容赦を賜りたく、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

20周年記念事業プロジェクトチーム リーダー 秋山 繁

藤沢のみどりとともに、さらに10年 2023年3月発行

発行：特定非営利活動法人 藤沢グリーンスタッフの会

住所：251-0016 藤沢市弥勒寺1-22-21 まちづくりハウスみろくじ内

ホームページ：<https://www.f-green-s.com/>

20周年記念事業プロジェクトチーム

リーダー：秋山 繁

荒井 俊行・伊奈 敏治・小笠原 多加子・櫛山 文夫・國分 俊明・笹脇 弘

澤 貴美子・高橋 正秋・角田 政史・西澤 雅三・樋口 弘之・三好 尚武

禁無断淡彩

藤沢のみどりとともに20年

